

翻訳 セルバンテス著 ドン・キホーテ(十九)

著者	岡村 一
雑誌名	熊本学園大学文学・言語学論集
巻	20
号	1
ページ	54-106
発行年	2013-06-25
URL	http://id.nii.ac.jp/1113/00000164/

ドン・キホーテ (十九)

セルバンテス (岡村 一訳)

第十九章

恋の傷手に苦しむ羊飼いをめぐる冒険、およびそのほかの実に面白い出来事が語られる。

ドン・ディエーゴの村を出てまもなく、聖職者とも学生とも見える二人の人物と二人の農夫が、おのおのロバに乗ってやってくるのに出会った。学生のうちひとり、毛布袍に収めるような具合になにかを緑の亜麻布にくるんで携えていた。どうやら上等の白いラシヤ布を少々と、薄手の毛の長靴下二足のようなだった。もうひとり、先留めのついた真新しい練習用の鉄剣二振りだけを携えていた。一方農夫らの荷物はこれとは様子が違い、いかにもどこか大きな町へ出かけてあれこれ買い込み、それを持って村へ帰る途中といった趣であり印象だった。初めてドン・キホーテを見た者は誰しもどきりとするが、この学生と農夫とも例外ではなかった。彼らは、普通とはあまりにかけ離れた格好をしたその人物が何者か知りたくてたまらなくなった。

ドン・キホーテは四人に挨拶し、行き先を尋ねた。そして同じ方角とわかると道連れになりたいと言い、ゆつくり進んでくれるよう頼んだ。彼らの若いロバのほうが愛馬より足取りが軽かったのだ。ドン・キホーテは相手が速度を緩めざるをえないよう、自分はこれこれこういう者で、冒険を求め天下を隈なく旅する遍歴の騎士の道にあり、

その務めを果たしている、と手短に自己紹介した。さらに、本名はドン・キホーテ・デ・ラ・マンチャながら、異名として〈ライオンの騎士〉と称しているとも伝えた。農夫らには全然ちんぷんかんぷん、一体何語で喋っているのかという感じだった。けれど学生達のほうは理解し、すぐに頭がおかしいのだとぴんときた。とはいえそれでもなお彼らは、一応「ほう！、たいしたものだ」といった眼差しを向けてみせ、うちひとりが言った。

「そうですか。冒険を求める騎士というのはあてどなく旅しているのが通例ですが、もしその最中であればついていらつしやいませんか？、それはそれは豪勢な結婚式が見られますから。こんな凄いのはこれまでラ・マンチャはもちろん、その周辺の相当広い範囲でもめつたになかったでしょう」

ドン・キホーテは、そこまで言うとは王侯かなにかの婚礼か、と尋ねた。

「単なる農家同士のやつなんですが」と、その学生は答えた。「花婿はこの辺りきつての金持ち、花嫁は絶世の美女。その二人が前例のない、並外れた豪華版の式を挙げるというわけですよ、なにしろ新婦の村近くの牧草地を会場にするというんですから。新婦には〈器量よしのキテリア〉という本人に似つかわしい呼び名がつき、新郎は〈カマーチョ長者〉で通っています。歳はそれぞれ十八と二十二で似合いなんですが、どこそこの家の血筋はどうの、といった話にやたら詳しいお節介な連中の中には、器量よしのキテリアの家はカマーチョ長者の家より格が上なのに、などと言いたがる者がありません。でも今の世の中、そんなことは問題にならない。なんでも金、金。七難あろうが八難あろうが、みんなこれが隠してしまいます。カマーチョという人物も実際派手に金を使う男で、なんと会場の牧草地全体を木の枝や草花の屋根で覆わせました。しかもそれがかなり密に作ってあって、あれならおてんとさまの光も相当頑張らないと隙間を縫って地面の青草まで辿りつけないでしょう。踊りの余興も準備しています、剣舞やら小さな鈴を鳴らしてのやら。長者さんの村には、そんなものを鳴らしたり振りまわしたりするのがとても達者な人間がおりますので。それに手で靴を叩きながらの踊り、これがまた見物で。凄い数の玄人を頼んでいるんですから。」

でも今言ったことにしろ、言い残したほかの多くのことにしろ、その中のどれひとつとして今度の式を人の記

憶に残すという点ではもうひとつにはおよばない。つまりわたしはバシリオが式にやつてきて、悔し紛れになにかしでかすんではないかと見ています。これはキテリアと同じ村に住んでいる青年で、彼女の一家とは壁ひとつ隔てた隣同士。こうした状況は愛の神に、とうに忘れ去られたピュラモスとティスベの純愛を今の世に蘇らせる機会を与えました。というのはバシリオは小さいとき、まだ幼いときからキテリアが好き。キテリアもそれに応え、清い恋心のお返しをうんとしていました。こんなに仲睦まじい姿を見せられ、村では二人の幼い恋の噂をするのがみんなの楽しみになっていました。やがて二人は大きくなり、あるときキテリアの父親はバシリオに対し、それまで許していた家への日常的な出入りを禁じることになりました。そればかりか今度は娘をカマーチヨ長者に嫁がせる腹を決めたんです、疑心暗鬼に陥って余計な心配をしたりせずに済むよう。バシリオは婿として不合格でした、変な血こそ混じっていなかったものの、なにせ貧乏でしたので。けれどやつかみなしに事実を言えば、あれだけ運動能力に恵まれた男は、わたしが見たことがあります。槍投げは拔群、レスリングでは敵なし、玉転がしだってそれはうまい。走れば鹿並みに速く、跳べば山羊以上に高く跳び、ピン倒しはまるで魔法を使っているよう。そのうえ歌を歌わせても天下一品で、ギターを手にとればまるで語らせるがごとく弾く。けれど中でも飛び抜けているのは剣の腕前ですよ、まさに達人なんですから」

「その剣の腕ひとつにて」と、間髪を容れずドン・キホーが言った。「その若者は美女キテリアはおろか、仮にギネシア王妃が今の人にてありせばこれすら娶る値打ちがござろう、ランスロットやらその他邪魔立てせんとする者どもやらの切齒扼腕いたすを尻目に」

「そいつをうちの女房に聞かれたらてえへんだ！」と、それまで黙って聴いていたサンチョ・パンサが声をあげた。「あいつときたら、縁結びは釣り合う相手と、なんてうるせえのなんの、なにせ《牛は牛連れ、馬は馬連れ》ちゅう諺信じてやがるで。おら、バシリオ兄さんがだんだん気に入ってきただ。だで憚りながらおらとしては、こいつにそのキテリア姉さんを嫁にしてもらいてえだ。ぞっこん惚れた同士が一緒になるのをじゃまするやつにはええ往生、ええ後生がありますように（サンチョは、豆腐の角に頭をぶつけて死ね、という意味でこれを言った）」

「親はしかるべき相手、しかるべき時を選び、わが子を縁組みさせる」と、ドン・キホーテ。「単に惚れた腫れたで夫婦めおとになってよいのであれば、その権限をば蔑ろないがしにしてしまふ仕儀となろう。もし心のままに夫を選ばせれば、家に仕える奉公人がよいと言いだす娘があるやもしれん。たまたま街で見かけ、わが目に凛々しき貴公子と映るも、その実はったりだけのあさはかなる男に心惹かれる娘とてあろう。伴侶選びに心の目はのうてはならんもんじゃが、愛やら恋やらでのぼせあがればそれはすぐに曇つてしまい、誤つた縁結びをしてしまいがち。そうならんためには、なみなみならぬ賢さと天の格別のお導きがなくてはならん。誰かが長い旅へ出る気になったとせい。もしも賢明であれば出立に先立ち、道中の連れに確かで穏やかな人物を探すであらうて。されば死しという終はつの地まで生涯かけて歩む旅じやとて、そうせねばならん道理。しかも夫婦たる以上、この連れは寝るとき、食うとき、ともかく片時も傍を離れんのじゃ。なおさらではないか。このわが妻という道連れは、いったん買うたあとも返品や交換や取り替えのきく商品のごときものではない。なくばならんわけではないが、ひとたび娶ればもはや同体、生涯を共にするほかない。夫婦の絆は首に掛けたが最後ゴルディオスの結び目と化し、死に神の鎌が断ち切らんかぎり外す術はない。結婚についてはまだまだ語れようが、この辺りでやめておく。バシリオの件でまだ言い残したお話のありやなしや、それをば修士殿にお伺いせねばならんのでう」

これに対し、まだ学業半ばの学士なのか、ドン・キホーテがそう呼んだようにすでに修士なのか判然としないその人物は答えて、

「この話であと言い残したのは、器量よしのキテリアがカマーチョ長者と結婚すると聞かされて以来、バシリオの顔から笑いが消え、話もとりとめがなくなつた、いつもなにかぶつぶつ呟きながら考え込むような暗い顔で歩いていて、どう見ても頭がおかしくなつたとは思えない、これぐらいでしょうか。ろくに食べもしなければ眠りもしない。たとえ食べても果物ぐらい。寝るとしても、外の固い地面の上であさましい畜生みたいに横たわるだけ。ときどき空を見つめるかと思えば、一転、地面を凝視したり。そんなときはあんまり動かないもので、着せた服が風に靡く人形としか思えないほごです。要するに胸が張り裂けている様子が有りありというわけで、バ

シリオを知る人間はみんな心配しているんですよ、明日器量よしのキテリアが結婚式で『はい』と誓えば、それが彼の死刑宣告になるんじゃないかと」

「でえじようぶ、なんとかなるべ」と、横からサンチョが言った。「《窮すれば通ず》ちゅうでね、誰も先のこととはわからねえ。これからあしたまではまだでえぶあるだ。家が一時間——それどころかあっちゅう間に倒れるときだつてねえでねえ。降つてるかと思うとぱつと照りだし、照つてるかと思えばさつと降りすのだつて、おら、見てきただ。晩に床につくときにはびんびんしてたやつが、朝には冷たくなつてることだつてあるだ。教えてくだせえまし、ひよつとして運の車のまわるのを釘打つて止めたと自慢してる人間がいるかね？ まさか、いるわけがねえ。おら、女の言う『うん』と『いや』のあいだに、針の先せえ立ててみる気になれねえ、だつてそれだけの隙間がねえべえで。どうだね、キテリアは心底本気でバシリオに〈ほ〉の字かね？ もしそうなら、おら、バシリオをてえした果報者と呼んでやるべ。ちゅうのも、なんでも聞いた話では《惚れてしまえばあばたもえくぼ》、銅が金に、貧乏が金持ちに、目やにが真珠に見えるらしいで」

「ええい、なにを申したいのじゃ？ いらいらするやつめ」と、ドン・キホーテは声を荒らげた。「そちが諺やらくだらん話やらをずらずら並べだせばほんにうんざり、我慢せよと言うほうが無理じゃわ。こりや愚か者、そちごときがなにを知つておる？、釘の、車の、へちまのと抜きおつて」

「あんれまあ」と、サンチョが目をまるくした。「では、おらがなに喋つてるかわかりなさらねえだねえ？ だつたら言つてることがでたらめに聞こえてもしかたねえべ。だけど平気だ、自分でわかつてゐるで。ちゃんと知つてゐるがすよ、おら、今まであれこれ喋つてきたけど、そんなにとんちんかんだったでねえ、ただ、ほれ、なにかちゅうとおめえ様がおらの言うこと、それからすることにせえ目頭立てなさるだ」と

「それを申すなら〈目くじら〉じゃ」と、ドン・キホーテ。「〈目頭〉ではない。言葉をむちゃくちやに使いおつて、たわけめが」

「そんなにがみがみ言わねえでも」と、サンチョ。「だつて知つてなさるとおり、おら、都育ちでもなければ、サ

ラマンカ大学で勉強したでもねえで、細けえ言葉遣えの間違えなんてわかるはずねえですよ。ほんとに、てえげえにしてもらいてえだ。田舎者にトレド生まれみてえに喋らせて、どうするちゅうだね？ それにトレドの人間にしたところで、立派な言葉遣えの者ばかりとはかぎらねえべ」

「それはそうだ」と修士は頷き、「同じトレドでも、テネリーアスやソコドバルあたりの下層の地区に生まれ育った連中は話にならない。大聖堂の回廊で、ほとんど日がな一日のんびり過ごしているような人達とはわけが違う。けれどどちらもトレドの人間に変わりはないんだから。純粹な本来のスペイン語、品のある明晰なスペイン語というのは、たとえ生まれはマドリッド郊外のマハダオーンダ村であれ、教養ある宮廷人が話すような言葉ですよ。《教養ある》と頭につけたのは、そうではない宮廷人も多いからですがね。教養こそ正しい言葉遣いのもと。これがあればおのずと言葉をきちんと使えるようになる。実はおふた方、わたしはなんの因果かサラマンカ大学で教会法を勉強するはめになりまして、平明で無駄のない言葉で喋れるというのがいささか自慢なんです」

「君の自慢は言葉より、むしろそこに持つてゐる鉄剣の使い方だ」と、もうひとりの学生が茶々を入れた。「そうじゃなければ、さぞかし首席でのご卒業だったろうね、びりじゃなくて」

「おいおい学士さんよ」と、修士は言つた。「君は剣術理論を机上の空論と馬鹿にするが、世の中にそれぐらい間違つた考えはないぞ」

「僕に言わせればこいつは考えじゃない。確固たる事実だ」と、そのコルチュエーロという名の学士は言い返した。「実地に示せと言うんならな、君は剣を二本持つてゐるし場所だつて悪くない。僕の剣の腕と腕つぶしの強さ、これに人一倍持つてゐる負けん気を合わせれば鬼に金棒だ。今からひと勝負して、言つた言葉に間違いはないって認めさせてやるぞ。さあロバから降りて、円の動きとやらでお得意の足運びをしてみろ。剣を構えてみる。理論を実践してみろ。僕の自己流新剣法で真つ昼間に星を見せてやるよ。こいつは神様の次ぐらい頼りになつてな、おかげで僕は誰にもひけをとらない。どこのどいつにだつて勝てるんだ」

「君がひけをとらないうちでどうでもいいが」と剣客修士。「ロバから降りて最初に足をつける場所が、ひよつ

として君の墓場になるかもしれないぞ。要するに自分が馬鹿にした剣術にやられ、そこで一卷の終わりという話だ」
「やるもんならやってみる」言うが早いかコルチュエーロは口バから飛び降り、修士が口バに括りつけていた剣の一本を荒々しく引き抜いた。

「お待ちめされい」と、それを見てドン・キホーテが制した。「不肖拙者、この勝負の審判をば相務め、かしましく論じられるもいまだ決着を見ぬ、果たして剣術は幾何学なりやの問題の判定をばつかまつらん」

言うとドン・キホーテはロシナンテから降り、槍を握つて道の真ん中に立った。が、早くもそのとき修士はあざやかな身のこなし、見事な足捌きで相手に迫っていた。コルチュエーロも対抗すべく、俗に言う《目から炎を発しつつ》といった気合いで進み出た。連れの農夫二人は口バに乗ったまま、この凄惨なる死闘劇を前に手に汗握る観客の役どころを務めていた。コルチュエーロは右袈裟懸け、左袈裟懸け、突き、幹竹割り、両手斬りと、蠅よりうるさく降る霰よりもさかんに、次々技を繰り出した。その迫力たるや、まさに猛り狂うライオンに等しかった。だがそれにもかかわらず、先留めをつけた修士の剣先で顔を打たれ、ことごとく防がれた。気合いを込めて踏み込もうとするたび、そうやって勢いを止められ、まるで聖遺物みたいに剣に接吻させられた。ただし接吻は接吻でも、本物の聖遺物に普通するような、あるいはすべきであるような、敬虔な接吻ではなかったけれども。

あぐくのはてコルチュエーロは、着ている短いスータンの胸をいのように突かれたうえ、その裾を蛸の足みたいに裂かれ、帽子も二回はたき落とされた。やがてへとへとになった彼は悔しさと腹立たしさで自棄になり、柄を握り直して剣を思い切り遠くへ投げた。立ち合っていた農夫のひとりで、公証人の仕事もしていた男がそれを拾いにいった。後日彼が証言したところによると、剣はほとんど四分の三レグア先まで達していたとか。この証言は柔よく剛を制するという事実を、まさに明確に知りかつ悟るための格好の例となってきたし、今日においてもまたそれには変わりはない。

コルチュエーロは地面にへたり込んだ。サンチョが傍へいつて声を掛けた。

「学士様よ、もしもおらの勧めを聞く気があるだったらね、ほんとにほんと、これから先誰かに喧嘩ふっかける

ときは、剣術でなく素手か槍投げの勝負にしときなせえまし。若えし力もありなざるから、そっちのほうが向いてるだ。なにしろ人の話では、剣の達人と呼ばれる人達は切っ先を針の穴に通すそうだで」

「間違いに気づけてよかった。なにが本当か身をもつて知ったよ。ひどい勘違いしてた」

コルチュエーロはそう言って立ちあがると、修士を抱擁した。以後二人はいちだんと親密になった。剣を拾いにいった公証人の男がなかなか戻ってきそうになかったので、遅くならないうちキテリアの村へ着きたかった二人は、待たずに先にいくことにした。四人ともその人間だった。

残りの道中、修士は皆に対し、あれこれ図形を用いて数学的証明を行ないながら、剣術理論のすぐれた点を論理的な言葉で滔々と説いた。おかげで面々はそのすばらしさを理解した。むろんコルチュエーロは間違った思い込みから完全に脱却した。

やがて日が暮れた。もうすぐ到着という地点まできたとき、一行の前に現われたのは村の手前に広がる、無数の星が煌く夜空のような光景だった。また、笛や太鼓やサルテリーオやアルボーゲやタンバリンやソナーハなど、さまざまな楽器の快い音が雑然と混じり合つて聞こえた。近くまできて見ると、村の入り口に枝葉で拵えた「木」が立て並べられ、それに夥しい数の明かりが吊るされていた。そのとき風はその「木々」の葉がそよがないほどに弱く、明かりは静かに灯っていた。楽器を鳴らしていたのは婚礼の盛りあげ役の者達で、いくつもの組に分かれ、歌ったり踊ったり、あるいは上記のさまざまな楽器を鳴らしたりしながら、その気持ちのいい場所の中をまわっていたのだった。そう、まさしくその野原中を歓喜そのものが駆け巡り、幸福そのものが飛び跳ねているような雰囲気だった。

これとは別に大勢の人間が棧敷の設営にかかっていた。カマーチヨ長者の婚礼、裏返して言えばバシリオの葬儀、それが翌日盛大に行なわれるその場所で披露される予定の劇や踊りをゆつくり見物するための席だった。ドン・キホーテはコルチュエーロ学士や農夫が、ぜひ、と誘ったにもかかわらず、村へはいろいろとしなかった。彼は、野山にて石に枕するが遍歴の騎士の習い、たとえ黄金の屋根の御殿に招かれようとも人里に宿を求めるは邪

道なり、と釈明した。本人にしてみれば十二分な理由だった。こうしてドン・キホーテは少しばかり道を逸れた。残念無念だったのはサンチョである。ドン・ディエーゴの「城」、すなわち屋敷で受けたもてなしが頭をよぎっていたからだ。

第二十章

カマーチョ長者の婚礼と、貧乏バシリオの事件が語られる。

雪のはだえのアウロラが輝くフォイボスと呼び寄せ、温かい光の煌きに身を晒して黄金の髪を濡らす水の真珠を乾かしはじめるや、ドン・キホーテは気怠い体^{けだる}に喝を入れて飛び起き、サンチョを呼んだ。家来はまだ依然として軒をかいていた。それを見たドン・キホーテは起こそうとする手を止め、こう呟いた。

「まことにのう、天下広しといえどそちに優る果報者はおらん。他人^{ひと}を妬まず他人に妬まれもせず、心安らかに眠っておるわい。魔法使いにつけ狙われもせねば、魔法で不意打ちを食うこともない。安らかに眠っておるわい、今一度言うが、幾度でも言うが。愛しの姫ゆえの嫉妬に苛まれ、少しも眠れぬまま一夜を過ごすこともなく、負うた借金^{借金}の返済を思い煩い、あるいはいかにしておのれと不安におのれの小さな家族の明日の糧を得るかを悩み、輾転反側して明かす夜もない。野心ゆえの焦りもなければ、現世の虚飾ゆえの心労も知らん。なにせそちやおのれのロバに餌を与えるほか望みはなく、わが身の心配はわしにまると背負わせておる、家来を養うは奉公への当然の見返り、果たすが習いのあるじが務めじゃでのう。家来が眠るあいだあるじはまんじりともせず、いかに養うてつかわすか、引きあげてつかわすか、褒美を与えてつかわすかに心を砕く。天が頑なに大地に慈雨を恵まんのを見て頭抱えるは家来でのうであるじ。なにせ実り豊かにして豊穰なる年の奉公に報いるため、凶作と飢饉の年にも食わせてやらねばならんでのう」

そのあいだもサンチヨは白河夜船、うんともすんとも言わなかった。もしもドン・キホーテが槍の石突きで小突いて起こしていなければ、いつまでも眠り込んだままだったろう。何度も小突かれてやっとサンチヨは目を覚まし、しばらく寝ぼけ眼でぼうっとしていたが、やがてはつと辺りを見まわして言った。

「あの木の枝でこさえた屋根のあたりから、なにかぶんぶん匂ってくるだ。おらの鼻がおかしいでなければ、これは豚の脂身焼く匂い。黄水仙や麝香草の匂いとはでえぶ違うだ。こんな匂いではじまる婚礼だったら、これはきつといくらでも派手に飲み食いできるべなあ」

「よさんか。卑しいやつじゃ」と、ドン・キホーテ。「どれ、例の婚礼とやらを見物にゆこうではないか。袖にされたバシリオがなにをしてくすか見ものじゃぞ」

「それはなんでも好きにやればええだ。なにせ貧乏でキテリアを嫁にしそこなっただものなあ」と、サンチヨ。「だけれんど考えてみれば、文無しが高望みしただけの話でねえべかね? 正直言っておめえ様、おら、貧乏人は分を守るが身のため、鳥は鵜の真似してはならねえちゅう考えでがすよ。腕の一本ぐれえ賭けてもええけれど、カマーチヨ旦那は金を腐るぐれえ持つて、銀貨でバシリオを生き埋めにだつてできるべ。それに間違えなしだで、だつたらいくらバシリオが槍投げや剣術が得意でも、キテリアはよっぽど馬鹿だべよ、そんなつまらねえ取り柄にぼつとなつて、ええべ、やら首飾りやら指輪やらを捨てるとすれば。こんな贈り物、今までカマーチヨ旦那にもらつたべ。これからだつてたぶんもらえるべ。どんなに槍が投げられても、どれだけ剣捌きが見事でも、そいつを抵^{かた}当に居酒屋で酒の一杯も飲めるわけでねえ。たとえそれが豪傑のデイルロス伯でも、こんな技や芸は一文にもならねえ。ところがこれが金持ちとなると、それはもうてえした箔になるだ。しっかりした土台があつて初めて建つ立派な建物。世の中、金に優^{かな}る土台も基礎もねえ」

「もうよい、わかつた」と、ここでドン・キホーテが遮った。「講釈は結構じゃがほどほどにせい。そちゃんにかというとすぐべらやりだが、止められねばさぞ寝る間も食う間ものうなることであらうのう、それで時を使い果たしてしまおうで」

「おめえ様が忘れっぽくねえお人なら」と、サンチョ。「今度の旅に出る前に二人でした取り決めのひとつひとつを覚えていなさるべ。その中に、おらはなんでも好きに喋つてええだ、ただし他人ひとの悪口言つたりあるじの体面傷ついたりしねえこと、ちゅうのがあつたでがすよ。今までこの但し書きには背いてねえと思うけんど」

「はて、さような二項があつたかのう」と、ドン・キホーテは首を傾げた。「まあ、たとえあつたにせよ、喋るのはやめにしてついてもいい。ゆうべ聞こえたあの樂の音が、はやまた谷を賑わせておる。さだめて朝の涼しいうち婚礼を行なうつもりじゃらうて。昼間は暑うなるでのう」

サンチョはあるじの言いつけに従い、ロシナンテに鞍を置き、自分のロバにも置いた。二人はそれぞれ跨ると、ゆつくり進んで木の枝の屋根の下へはいっていった。

最初にサンチョの目に飛び込んだのは、榆の木の丸太でまるまる一頭串刺しにした若牛だった。それを焼くため並みの山ほど薪が積まれ、火が焚かれていた。火の周りに並ぶ六個の鍋は、一般の鍋用のありきたりな鋳型で作られたものではなかった。というのも甕を横に切つたみたいに深底で、それぞれにひとつの処理場の肉が全部はいるのかというぐらい容量があつたのだ。だから羊がまるごとどぼんどぼんと放り込んであつたのに、まるで鳩の雛と同じ。下に沈み込んでしまつて外からは見えなかった。皮を剥いた兎や羽を筆つた鶏が無数に木に吊るされ、鍋底深く沈められる順番を待つていた。ほかにもさまざまな種類の鳥や獣の獲物が数えきれないぐらい木に吊るされ、肉が柔らかくなるよう空気に晒されていた。

サンチョが数えてみると、ニアローバ以上はある酒の革袋が六十個以上あつた。あとでわかつたが、そのどれにも年代物の葡萄酒が詰まつていた。また、真つ白いパンを積み上げた山が、脱穀場でよく見かける小麦の山のように並んでいた。チーズはまるで井桁状に積んだレンガさながら。そうした形で壁のように連なつていた。それから、染め物屋の鍋より大きな二つの鍋に油を満たし、小麦粉を練つたものを揚げていた。揚がると二本の大きなシャベルですくい、傍に置いた蜂蜜シロップの鍋に放り込んでいた。

料理番は男女合わせ五十人以上いた。全員こざつぱりしたなりで、かいがいしく、そして楽しげに立ち働いて

いた。あの丸焼き用の若牛の腹が膨れているのは、幼い小さな子豚を十二匹詰めて縫い合わせてあったからだ、それは牛の肉を柔らかくし、かつ味をよくするためだった。香辛料も各種取り揃えてあった。どうやらリブラ単位ではなく、アローバ単位で買ってきたようだった。それらはまとめてひとつの大きな箱に入れられ、人目に晒されていた。ひと言で言えばその婚礼の支度は、田舎風ながら一軍に酒食を提供できようかというぐらい豪勢極まりないものだった。

サンチョ・パンサはこのひとつひとつに目を留め、ひとつひとつに目を凝らし、ひとつひとつに涎を垂らした。まずあの深鍋の煮物に目を奪われ、心を奪われた。中ぐらいの土鍋一杯分程度であれば、むしろむしろ平らげてしまえそうだった。次に心惹かれたのは酒の革袋で、最後はフライパン菓子だった（あんな深鍋をフライパンと呼んでよければだが）。とうとうサンチョは矢も盾もたまらなくなり、せつせと働いていた料理番のひとりの傍へ吸い寄せられていった。そして自分のコチコチのパンをそこに並んでいる大鍋の汁に浸けさせて欲しいと、下手に、おまけにいかにもひもじそうな声で頼んだ。するとその料理番は言った。

「おめえさん、今日はカマーチョ長者様のご威光で、ひもじさが隅っこで小さくなってる日だ。ロバから降りて、その辺に大杓子がねえか見てみなせえ。あつたらそれで鶏を一羽でも二羽でもすくって、腹の足しにするとええだ」

「大杓子、見当たらねえけん」そうサンチョが答えると、

「ちよつくら待つてくんろ」と料理番。「これは見損なつた。さてはおめえさん、でえぶお上品ちゅうか、肝つ玉の小せえお人だべな」

言うとバケツを掴んで、甕を半分に切った形のその大鍋のひとつに突っ込み、鶏三羽と鷺鳥二羽をすくつてサンチョに差し出した。

「ほれ、食いなせえ。朝のうちはこんなゝあぶくゝでもつまんどいて、昼飯まで腹をもたしとくとええだ」

「そいつを移すものがねえ」とサンチョが言うと、

「ならばこれごと持っていくなせえ」と、料理番。「今日はただでせえ家に金の唸ってるカマーチョ旦那にとって

嬉しい日、なんでも大目に見てもらえるで」

さて、サンチョがこんなやりとりをしているあいだドン・キホーテは、屋根で覆われた会場の一方から十二人の農夫が、各自惚れ惚れするほど見事な馬に乗ってはいつてくるのを眺めていた。乗り手は全員が晴れの日用の一張羅を着込み、馬は豪華で華やかな遠出用の馬具を着け胸懸むねがけに鈴をたくさん下げていた。一団は整然と隊伍を組み、野を一度ならず何度も駆け渡りながら、次のように歓声をあげ、歓呼の声をあげていた。

「カマーチョ万歳、キテリア万歳！ 大金持ちに別嬪の花嫁！ 世界一別嬪の花嫁！」

それを聞いてドン・キホーテは呟いた。

「ほう、こやつらめ、わがドウルシネーア・デル・トボーソ姫のお姿を拝したことがないらしい。拝しておれば、そのキテリアとやらを褒め称えるにも遠慮があるはずじゃ」

まもなく会場のあちこちから、さまざま種類の踊りの組が次々繰り込んできた。中のひとつに、粋な姿の潑刺とした若者二十四、五名ばかりかなる剣舞の組があった。揃って呟いほど白い薄手の麻の衣装を纏い、頭には上等の絹糸で色とりどりの刺繍を施した布を巻いていた。組を率いていたのは、ひとときわ動きの軽快な若者だった。彼は馬で駆けていた一団のひとりから、誰か組の中で怪我をした者はないかと尋ねられると、

「おかげさまで今のところは大丈夫。みんな無事で」

そう答えてまた仲間といっしょになり、くるくるとまわりながら見事に舞った。剣舞は見慣れたドン・キホーテだったが、これほど感心したことはなかった。

同じく繰り込んできたとびきり美しい娘達の踊りにも目を奪われた。皆とても若く、十四歳を下限に、一番年嵩でも十八に届いていないようだった。少女らは一様に農民風の緑の晴れ着に身を包んでいた。髪は前の部分を三つ編みにしてまとめ、残りを垂らしていた。誰もが日の光を欺くとても美しい金髪で、さらにそれをジャスミン、薔薇、葉鶏頭、すいかずらを編んだ冠で飾っていた。彼女らは風格ある老翁と威厳に満ちた老女に先導されていたが、どちらも歳に似合わぬ軽やかで矍鑠たる身のこなしを見せていた。踊りの音楽を奏でていたのは、一

本のガイタ・サモラーナだった。少女らの顔や目の表情に湛えられた清らかさ、軽やかな足運び、それはまさに天女の舞と言えた。

彼女らに続き、また別の組が登場した。それは芝居舞踊と呼ばれる凝った踊りを披露する一団だった。八人のニンフがいて、それが二列に分かれ、ひとつは愛の神クピド、もうひとつは〈利益〉の化身に率いられていた。クピドは翼を着け、弓矢と箠^{えびら}を携えていた。〈利益〉の化身は、金色の絹布にさまざまな色の豪華な刺繍を入れた衣装を纏っていた。クピドに従うニンフらは、背中に名前を大書した白い羊皮紙を着けていた。先頭のニンフのそれには〈詩歌〉と書かれ、二番目のには〈分別〉、三番目のには〈よい家系〉、最後のには〈勇氣〉とあった。〈利益〉の化身に続くニンフも同様で、先頭から順に〈気前のよさ〉、〈贈り物〉、〈富〉、〈平和的所有〉と読めた。この一団の前を四人の野蛮人に引かれた木の城が進んでいた。四人とも蔦と緑に染めた麻の衣装があまり板に付いていたものだから、サンチョはもう少しで逃げだすところだった。城は正面と四面の壁それぞれに、〈節操の城〉と書いてあった。四人の楽士が一団のため、巧みに笛太鼓で囃していた。

愛の神クピドが踊りはじめた。そうして一連の動きを二通りしたのち、きつと上を睨むと、城の屋上の鋸壁^{のこぎりかべ}のあいだに立つ乙女を狙って弓を引き絞り、次のように吟じた。

われは無敵の神なるぞ、

空の上でも地上でも

大波うねる海原や

身の毛もよだつ地の底の

暗き世界のいずこでも。

いまだ恐れを知らずして

いかに無理なる企ても

願つてならぬものはなく
常のたやすきことなれば
自由自在に料理せん。

吟じおえると城のてっぺんめがけて矢を放ち、もとの位置へ戻つた。入れ替わりに〈利益〉の化身が進み出て、やはり同じだけ踊り、太鼓の音がやむのを待つて吟じだした。

俺は強いぞ、クピドより。

やつなど俺の露払い。

俺の血筋は世界一、

この世で並ぶ家はない。

知らぬ者ない権門だ。

俺に惹かれて振舞えば

あさましくなる人の常。

俺はとり憑く、誰にでも。

お仕えるよ、俺流に、

いついつまでも離れずに。

〈利益〉の化身が引つ込み、次に〈詩歌〉が出てきた。〈詩歌〉は前の人物達同様ひとしきり踊つたのち、城の乙女を見つめつつ吟じた。

心蕩かす〈詩歌〉われ、

心蕩かす言葉にて

高潔、厳肅、真摯なる

思いを込めしソネットに

包み捧げん、わが心。

数限りなき褒め歌に

その柳眉をば顰めねば

人の羨む君なれど

運びてゆかん、さらになお

月の高みのその上に。

〈詩歌〉が場所を譲り、次に〈利益〉の化身の列から〈気前のよさ〉が進み出て、やはりひとしきり踊ったあと吟じた。

〈気前のよさ〉と人は呼ぶ。

他人^{ひと}に与えるそのときに

度を越すでなく、かといつて

ぐずぐず言つてやつと出ず

吝嗇漢でない様を。

けれども俺は今日からは

度を越し君に贈り物。

過剰は悪と知りつつも

この悪ならば身の誉れ。

財貨で示す恋心。

こうして二つの列の人物が、最後のひとりに至るまでかわるがわる出ては引つ込んだ。そうしてその間に踊り、ついで雅な、あるいは滑稽な詩を吟じた。記憶力抜群のドン・キホーテながら、覚えられたのは以上の詩だけだった。それが済むと今度は全員が入り乱れてくつついたり離れたり、軽やかな身のこなしでとても優美な動きをしてみせた。愛の神クピドは城の前を通るたび、上へ向けて矢を放った。他方、《利益》の化神は金色に塗った素焼きの玉を城に投げて碎いていた。

こうしてかなりの時間踊りが続いたあと、しまいに《利益》の化神が金で膨れあがった体にした、縞模様の大猫の皮の大きな巾着を取り出し、城めがけて投げつけた。城はそれが当たった衝撃で、板がばらばらになつて崩れた。中の乙女は体が剥き出しになり、まったく無防備な状態になった。すると《利益》の化神は仲間とともに駆け寄つて彼女の首に太い金の鎖を掛け、捕らえ屈服させ虜にしようとするしぐさを見せた。かたや愛の神クピドの一派は、それを見て鎖を外しにかかる演技をした。こうした一連の動きははじめからしまいまで、太鼓の音に合わせ、よく息の合った舞踊として行なわれた。やがて野蛮人らが両者を仲裁したうえ、手早く板を組み合わせて城を作り直し、乙女がまたもとどおり中にはいったところで大団円。見物人のやんやの喝采を浴びた。

ドン・キホーテは二つのひとりをつまみ、これを作、演出は誰かと尋ねた。村の司祭で、こんなことを考えさせたらばいかいこの人物だという答えが返ってきた。

「その学士というか司祭殿は」と、ドン・キホーテ。「さだめてバシリオ派ではのうてカマーチョ派なのでござるうて。また、夕べの勤行より風刺が得意な御仁じゃ。舞踊の中にバシリオが才とカマーチョが財力を、さてさて巧みに取り込んでござるわい！」

やりとりをじつと聴いていたサンチョ・パンサが言った。

「寄らば大樹の陰」、おらはカマーチョ旦那につかせてもらうべ」

「結局そうじゃ」と、ドン・キホーテ。「よう見てとれるぞ、サンチョ。やはりそちや百姓、強い者に尾を振る輩の仲間じゃ」

「おらが誰の仲間かは知らねえ。だけれんど、よく知ってるでがす、カマーチョ旦那の鍋だからこそこんな上等の『あぶく』がすぐえただ。バシリオの鍋からはこんりんぜえ無理だべ」

言うたサンチョは鷲鳥と鶏でいっぱいのパケツを示した。そうして鶏をひとつ掴んでむしゃむしゃぱくぱくやりだしたが、しばらくして言った。

「バシリオの芸なんか屁の突つ張りにもならねえ！ だって人の値打ちは持つてる財産、持つてる財産は人の値打ちだでな。うちの祖母さんが言ってただ、世の中には、持つた持たねえか、この二つしかねえと。祖母さんは持つほうが好みだったけれど。近頃は、ドン・キホーテ様よ、学問の蓄えより金の蓄えちゅう世の中。なにせ口バも金びかに飾り立てれば、荷鞍つけた馬より立派に見えるでね。だで、もういつべん言わせてもらうだ。おら、カマーチョ旦那につくでがす。旦那の鍋には鷲鳥や鶏、野兎や家兎みてえな『あぶく』がうんとこさ浮いてるだ。ところがバシリオにご馳走になるとしても、まあ、そんなことはあるめえけれど、鍋の中身はかすの浮いた湯ぐれえだべ」

「講釈は終わったか、ん？」と、ドン・キホーテ。

「終わったことにするべ」と、サンチョ。「どうやらおめえ様、聞かされてうんざりちゅうお顔だで。もしそうでなければ、あと三日は種切れしねえところでがすよ」

「いやはや」と、ドン・キホーテ。「冥土の土産に一度ぐらいはそちが黙っておる姿を見たいもんじゃ」

「この調子だ」と、サンチョ。「おらのほうが先におつ死んで土に埋められちまうべ。そうなった日にはおそらくすつかり無口になって、この世の終わりとは言わねえまでも、閻魔様の前に立つまではひと言も喋らねえべ」

「たとえ死んで黙るとしても」と、ドン・キホーテ。「これ、サンチョよ、今まで喋ってまいった分、今喋つておる分、死ぬまでに喋る分とは、とても釣り合いがとれまいて。それにじゃ、わしが先に死んでそちが残るというがごく自然な順序。されば夢にも思わんぞ、たとえそちが飲んでおるあいだ、寝ておるあいだですら、その口が閉じておるを見られようとはのう。ほんに感心するわい」

「ところが」と、サンチョ。「ほんとうにもう、お迎えちゅうか人の生き死にぐれえあてにならねえものはねえ。老少不定ちゅうやつでがすよ。村の司祭様のお話で聞いたんだけど、死に神は王様の見あげるようなお城も、貧乏人のちつぽけなあばら家も、区別しねえでやつてくるだとか。こいつは恐ろしく強えうえ、妙な氣どりがねえ。好き嫌えせず、なんでも食らい、なんでもがってん。どんな人間だろうが、歳がいくつだろうが、どれだけ偉だろうが、片端から袋に詰め込んでしまうだ。この草刈りは昼寝なんかしねえ。いつときも手を休めず、枯れ草も刈れば青草だつて刈つちまうだ。犬みてえにがつついてやがつて、いくら食つても食い足りず、目の前にあるものを手当たりしでえに噛みもしねえでぐつと丸呑みするらしいだ。見た目に腹は出てねえけど、どうやら中には水が溜まつてる様子。水差しの水をラツパ飲みするみてえに、もつばら生きてる人間の命をがぶ飲みしたくてたまらねえようで」

「よし、それまで」と、ここでドン・キホーテが遮つた。「ほろが出んうち、ほどよいところでやめておけ。言葉は無学な百姓なりじゃが、死について語つた中身は、ほんに一流の説教師の口から出てもおかしゅうないもんじゃ。いやいやサンチョ、そちや天分がある。才人じゃ。もしも説教師とされ、世間をまわつて氣の利いた話をいたせばさぞや……」

「まともに暮らしてれば、まともな説教だつてできるでがす」と、サンチョ。「おらはただそれだけ、難しい学問なんかは知らねえ」

「知る必要もなからうて」と、ドン・キホーテ。「それにしてもわしやいまひとつ納得も得心もゆかん。知恵のものと神への畏れじゃというに、神よりトカゲを恐れるがごとき男に、なにゆえさよう知恵が備わつておるかのう」

「旦那様よ、自分の騎士道についてだつたらなんなりと言いなせえまし」と、サンチョは口を尖らせた。「だけれど他人^{ひと}がなにを恐れてるだのいねえだの、そんな決めつけするのはよしてもれえてえでがす、おらだつて並みの人間と同じ、神様のことはそれはもう恐れてるで。だけんどとにかく、この『あぶく』を早えとこ片づけさせてくたせえ。ほかは『すべて虚しき言葉、審判^{さばき}の日に糺さるべし』」

言うサンチョはバケツに再突撃した。彼の食いつぷりがあまりにいいものだから、ドン・キホーテも口の中に唾が湧いた。そのままにもなければ間違ひなく助太刀していたらう。ところがこのとき新たな展開があつた。それを今度は語らなければならない。

第二十一章

引き続きカマーチョの婚礼。および、そこで起こつた面白い出来事。

ドン・キホーテとサンチョが前章で述べたようなやりとりをしている最中、人の叫び声と大きな物音がした。それは騎馬の一団が発したものだつた。新郎新婦を迎えにいくつと、賑やかに叫びながら駆けまわつていたのだ。二人はさまざまな楽器を演奏する楽隊や、多種多様な扮装をした人々に囲まれ、司祭、双方の家族や親戚、近郷のお歴々一同など、いずれも晴れ着姿の一行に付き添われてやつてきていた。サンチョは花嫁をひと目見るなり眩^{くら}いた。

「こいつはどう見ても百姓娘でなく、雅^{みやび}な御殿女中のなりだ。いやいや凄^みえだなあ、遠目に見たところでは下げて首飾りは上等の珊瑚。着てる緑の服はクエンカ織りの三十本糸のピロードだ。でもって飾りの部分はきつと白の麻布でこせえたやつだべ。いや、あれはサテンか、そうにちげえねえ。ほれ、両手の指を見てみる。黒玉^{くろぎよく}の指輪が嵌まつてるだ。——やつぱりあれは金、ぴかぴかの金に、雪みてえに白え真珠がびっしり嵌め込んである

指輪だ。それに間違えねえ。あの真珠は一個一個、きつと目の玉一個分ぐれえするべなあ。ええい、こんちくしう、ええ髪してやがるだ！ あれが鬢でねえなら、おら、おぎやあと生まれてこのかた、あれより長えのも、あれよりきれいな金髪も見たことねえ。あの品のよさ、姿のよさに、けちつけられるならつけてみるちゅうだ！ それにまるで実の房を鈴なりにして揺れてる棗椰子みてえだ。髪やら首やらにじゃらじゃら下げて、そっくりでねえか。掛け値なしにあれば上玉、どんな玉の輿にだつて乗れる娘っこだ」

ドン・キホーテはサンチョ・パンサの田舎者丸出しの褒め言葉に失笑したものの、彼自身もまた、わがドウルシネーア・デル・トボーソ姫を別にすれば、これほどの美人は見た覚えがないと感嘆していた。そのときキテリアの美しい顔はやや青ざめていた。結婚式を翌日に控えた花嫁は身支度でろくに寝られないものだが、そのせいかと思われた。一団は会場の一角に設けられた壇へ向かつて歩み寄っていた。そこは絨毯が敷かれ、木の枝で飾りつけられていた。その上へあがつて式を行なつたあと、踊りや扮装を凝らした人々を見物する予定になつていた。ところがもうすぐ着くというとき背後で喚き声がして、こんな言葉が聞こえてきた。

「ちよつくら待ちなせえ。なんちゅう愚かな人達だべ、そんなにばたばたと決めちまつて」

そう言う声に人々が振り向いて見ると、ひとりの男が喚いていた。どうやら炎模様の深紅の縁どりのついた黒いサヨを着ているようだった。さらに、死の象徴である糸杉の冠を被り、太い杖を握っているのも目にはいった。男が近づいてくるにおよんで、それがあの勇ましいバシリオとわかると場に緊張が走った。あんな言葉を叫んだあげくどうするつもりか、こんなときに出てきてなにかしでかすのではないか、人々はそう心配しながら見守った。

やがてバシリオは傍までやってきた。憔悴した様子で肩で息をしていた。彼は新郎新婦の前に立つと、鋼の石突きをついた杖を地面に突き立てた。顔面蒼白だった。バシリオはキテリアを見据え、しわがれた声を震わせながらこう言った。

「キテリアよ、おめえは薄情な娘だなあ。二人が守ると誓つた神聖な掟に従えば、おらちゅうものがあるかぎりおめえはほかの誰とも結婚できねえ。それを知らねえとは言わせねえぞ。これも知らねえとは言わせねえ。おら、

精出して働いてゆくゆくはひと財産作るつもりだったで、それまではと、いつも節度を守っておめえの操をたいせつにしていた。ところがおめえときたら、こんな真心への義理なんかきれいさっぱり忘れ、ほんとうはおらのものをほかのお人にくれてやるつもりだ。その旦那は金で幸せを、それもただの幸せでなくとびきりの幸せ買いなさるちゅうわけだ。よし、だったらたつぷりそれにひたらせてさしあげるべ。なにもその旦那にそれだけの値打ちがあると認めるからでねえ。それが神様の御心と諦めるからだ。おらがこの手で旦那の思いを阻むもの、妨げるものを片づけてさしあげるべ。邪魔者を消しちまうべ。カマーチョ長者様よ、薄情者のキテリアと末永く幸せにお暮らしなせえまし。添い遂げなせえまし。文無しのバシリオはさっさとくたばっちまうがええだ！ ひとつは貧乏神に幸せの翼をもがれ、真つ逆さまに墓穴の中へ落ちるだ！」

言うたバシリオは、地面に突き立てていた杖を攔んで引き抜いた。すると半分が立ったまま残り、それが杖に仕込んだ中ぐらいの長さの剣の鞘だったと知れた。続いてバシリオは柄と呼ぶべき部分を地面に突き立て、なんの躊躇もなくすぐさまひらりとその上に身を躍らせた。次の瞬間、血に染まった切っ先が背中に現われ、そのまま鋼の刃身が半分ほども突き抜けた。みずからの剣で串刺しになった哀れな男は、血まみれで地面に転がった。

友人らは彼の不幸、気の毒な運命に心を痛め、介抱しようとすぐさま駆け寄った。ドン・キホーテもロシナンテを乗り捨てて走り寄った。彼が抱き起こしてみると、まだ息があるとわかった。人々は剣を引き抜こうとしたが、同じく傍にきていた司祭に止められた。その前に告解させたほうがいい、剣を抜いたとたん死んでしまうだろうから、と言うのだった。だがそのとき、やや意識を取り戻したバシリオが悲しげな弱々しい声でこう訴えた。「キテリアよ、おめえには冷てえ仕打ち受けたなあ。おらはもうじき死なねばならねえけど、最後にひと女房になると言ってくれねえか。言ってくれたらまだしも思えるべ、こんな馬鹿な真似した言いわけが立つたとな。なにしろこれやったおかげで、おめえと夫婦になるちゅう幸せが手にへえるで」

それを聞いて司祭は、現世の幸せより魂の救いを考えたほうがいい、これまで犯してきた罪への赦しと、今犯した大罪の赦しを心の奥底から神に乞いなさい、と諫めた。それに対しバシリオは、まずキテリアが結婚を承諾

してくれなければ絶対に無理だ、もし願いを聞いてくれたら正しい心に返り、赦しを乞う気力も湧いてくるだろう、と答えた。

ドン・キホーテは致命傷に喘ぐ若者の訴えを聞いて、道理に適うもつとも至極なる願い、しかもまことたやし、またカマーチョ殿にとりても勇者バシリオが寡婦たるキテリア殿を娶るは面目ならん、父君の手より受けると変わらぬ面目なり、と格調高く言い、こう締め括った、

「この場にてひと言承諾のお返事をなされば済むこと。さようなされたとてあとでどうなるわけでもござらぬ、婚儀に続く新床は墓の中と決まつてござれば」

このやりとりは残らずカマーチョにも聞こえていた。彼はどうすればいいのか、なにを言ったらいいのかかわからず、ただ驚いておろおろするばかりだった。しかしバシリオの友人らに、キテリアが承諾するのを大目に見てやつて欲しい。でなければ彼の魂は救いの望みを持たないままこの世を去るはめになり破滅してしまうと、そうやいのやいの迫られ、ついに心を動かされ、というよりしかたなしに、キテリアが承知するならかまわない、思いを遂げるのがほんの僅か遅れるだけなのだから、と言った。

次に一同はキテリアを取り囲んだ。懇願する者あり、泣き落としに出る者あり、言葉巧みに言い聞かせる者あり、寄つてたかつて説き伏せにかかり、哀れなバシリオの妻にしようとした。ところがキテリアは大理石のように固い表情を作り、彫像みたいに黙然と佇むばかり。どう返事すべきかわからない、なにも言えない、なにも言わないと暗に伝えていた。司祭が乗り出さなければいつまでも黙っていたらう。司祭は、早く心を決めなさい、やるべきことはひとつだ、バシリオの魂は今にも体から抜け出ようとしている、迷つてぐずぐずしている暇はない、と急かした。そう言われてキテリアはなにも答えないまま、その美しい顔に悲しげな、つらげな表情を湛え、ふらふらとバシリオの傍へ歩み寄った。若者はすでに目が虚ろになり、ぜいぜい苦しい息を吐きながらキテリア、キテリアと口の中で呟いていた。キリスト教徒としてではなく、異教徒のように死んでしまいそうな気配だった。やがてキテリアはバシリオの傍へいくと、ひざまずいて無言で相手の手を求めるしぐさをした。バシリオは目を

見開き、じつと彼女を見つめながら言った。

「ああ、キテリアよ、やっと優しい気持ちになってくれたなあ。だけれど今となつてはその思い遣りは、おらにとどめを刺すナイフの役目を果たすだけだべ。なにしろせっかくおめえが嫁になつてくれるちゅうに、もうそれを喜ぶだけの力がねえ。苦しみに歯向かつて、恐ろしい死に神の影がどんどん目の前を暗くしていくのを止められねえ。ああ、おめえはおらの運命^{さだめ}の星だ！ おめえはおらに手を出せと言ひ、自分の手差し伸べてるだ。だけれど頼むだ、それが義理からだつたり、またおらを騙す気持ちからだつたらよしてくんろ。どうか言つて、聞かせてくんろ、進んでおらに手を委ねるだ、本心からおらを正式な夫と認め、手を差し伸べるだ。こないまわの際に騙すのは理不尽だでな。あれだけ真心尽くした人間にうわべを繕わねえでくんろ」

こう言いながら彼はときどき氣を失いかけた。そのつど、周りにいた者達はもうおしまいかとほつとした。キテリアは清純そのものの乙女らしい恥じらいに頬を真っ赤に染めながら、右手でバシリオの手を握りこう言つた。「おら、もう、梃子でも動かねえ。だで、真正正銘自分から進んであんたの正式な妻になるため手を差し出すだ。そして、馬鹿な考え起こしてこんなひでえありさまになつたせいで心が乱れたり血迷つたりしたでなく、本心から差し出すならあんたの手を握るだ」

「もちろん心が乱れたり血迷つたりして差し出すでねえ」と、バシリオは答えた。「頭は神様からもらったとき同様はつきりしてるだ。だで、おめえに夫としてわが身を託し、委ねるだ」

「おらも妻としてこの身を捧げるだ」と、キテリアも誓つた。「あんたが長生きしようが、このままおらの腕に抱かれて死んじまおうが」

「この兄さん、大怪我してるわりにべらべらよく喋るだなあ」と、このときサンチョ・パンサが言つた。「娘口説くのはええかげんにして、魂の心配しろと言つてやったほうがええだ。どうやら体から抜けかかつてるで」

こうして手を取り合つたバシリオとキテリアに、司祭が感動で目を潤ませながら結婚の祝福を与え、あわせて、新郎の魂に安らかなる休息を与えたまゝと天に祈つた。

ところがである。バシリオは祝福を受けるやいなやぱつと飛び起き、自分の体を貫いていた剣を実に無造作に引き抜いた。周りで見ていた者達は誰もが呆氣にとられた。やがてその中の、あまりものを考えない単純な連中が口々に叫びはじめた。

「奇跡だ、奇跡だ！」

だがバシリオはこう返した。

「いや、『奇跡だ、奇跡だ！』でなく、『狂言だ、狂言だ！』と言いなせえ！」

司祭はなにがなにやらわけがわからず、呆然として彼に近寄り両手で傷を探った。すると剣が貫いていたのは肉や骨ではなく、鉄の管だったと知れた。それはその場所にうまくとりつけてあり、中には血が仕込まれていた。あとでわかったのだが、その血は固まらないよう工夫されていた。

こうして司祭やカマーチョはじめその場にいた者の大半が、ひっかかった、一杯食わされたと悟った。ところが新婦は狂言とわかってても動じた様子はなく、それどころか、これは欺瞞に基づく結婚なのだから無効だとの声に、いや、やはり自分は妻になったのだと主張した。この様子を見て人々は、二人で示し合わせ合意のうえでひと芝居打ったにちがいないと思った。そのためカマーチョとその一派は恥をかかされたと怒り、血の復讐をしようとして大勢が剣を抜いてバシリオに向かっていった。同時に、ほぼ負けないぐらいの人数がバシリオに味方して鞘を払った。ドン・キホーテは馬に飛び乗ると盾をしつかり引き寄せ、槍を構え、彼らを押しつけて前へ出た。他方、こんな喧嘩騒ぎを一度として楽しいとも面白いとも思ったことのないサンチョは、先ほどおいしい^ズあぶくをすくった大鍋の並んでいる場所へ避難した。そこが不可侵の聖域みたいに感じられたのだ。

ドン・キホーテが大声で言った。

「しばらく、おのおのがた、しばらく。色恋の恨みに意趣返しは無粋でござるぞ。考えてもごらんなされ、恋といくさは相似たるもの。武略やばかりごと用いて敵を倒すはいくさの常道たり習いたると同様、恋の鞘当て、勝負にても、恋の相手の害となり名誉の失墜とならぬかぎり、念願達成のため嘘や駆け引き用いるは苦しからず。

天の正しきお計らい、慈愛溢るるご配慮により、キテリアはバシリオがもの、バシリオはキテリアがものであったのでござる。カマーチョ殿は大福長者にておわけば、いつ、どこでなりと、またいかようにも楽しみが購えましよう。それに引き換えバシリオ殿にはこの羊しかござらぬ。いかに力あればとてなんびとたりと奪うてはなりません。神の合わせ給いし者をば人が離してはなりませんまい。仮にそれをせんとする御仁あらば、その前にこれなる槍の錆になるとご覚悟めされい」

言うところドン・キホーテは槍を振りまわしはじめた。その迫力、手練の技の見事さに、彼を知らない者は誰もが怖気を震った。カマーチョはキテリアに拒まれて心に強い衝撃を受け、思いが一瞬にして吹っ飛んだ。さらに司祭からも諭された。賢明にして善意の人たる彼の言葉に、カマーチョも味方の者らも怒りが消えて心が静まった。剣を鞘に収めたのがいい証拠だった。彼らの中では、バシリオの芝居よりキテリアのいいかげんさを咎める気持ちのほうが強かった。またカマーチョはこう考えた、今までキテリアがバシリオを一途に愛していたとすれば、それは結婚後も変わらなかつたにちがいない、ならば妻にしたところでありがたみはなかつたろう、彼女を失ったのはむしろ天恵だ、と。

こうして心が和いだカマーチョとその一党が鉾を収めたのに応じ、バシリオ側についていた面々も皆緊張を解いた。カマーチョ長者は、こんな侮辱などなんでもない、蚊に刺されたほどの痛みもないと示すため、予定どおり結婚するのと変わりなく宴を続けるよう指示した。だがバシリオも新婦も仲間達もその場に留まることを望まず、村へ引きあげていった。金持ちに阿諛する輩や取り巻きがいるように、たとえ貧乏な人間でも知徳備わっていれば、やはり敬意を払い、その身を守ろうという追隨者はいるものだ。

彼らはドン・キホーテも招いた。勇者だ、つわものだと感嘆したのである。そんな中サンチョだけが、カマーチョの提供するすばらしいご馳走、豪華な宴を諦めるはめになったせいで意気消沈していた（宴は結局夜に至るまで続いた）。サンチョは肩を落とし、バシリオ一行に混じって進むあるじに従い、とほとぼ酒池肉林をあつめた。けれど未練たらたらだった。あらかた食べ尽くし平らげていたバケツの中身の僅かな残りを見るにつけ、

失いつつある至福、幸福に満ちた時が思い出された。こうして彼は腹でこそこそなかつたものの、沈んだ暗い表情でロバに跨り、ロシナンテのあとをついていった。

第二十二章

ラ・マンチャ中央部にあるモンテシーノスの洞窟で、剛勇ドン・キホーテ・デ・ラ・マンチャが見事なしとげた大冒険が語られる。

新婚夫婦はドン・キホーテが自分達の味方となつて助けてくれたことに恩義を感じ、さまざま下へも置かぬもてなしをした。また武勇はシッド並み、弁舌はキケロ並みと信じ、彼に知勇兼備の折り紙をつけた。忠臣サンチョも新婚夫婦のもてなしで三日間命の洗濯をした。二人は、あの「自殺」は互いに気脈を通じたうえでの狂言ではなく、美しいキテリアのまさにああした反応を期待してのバシリオひとりのたくらみだったと説明した。ただしバシリオが、友達の何人かには腹の内を明かしてあつた、そしてなにかのときには助けてもらう、ペテン芝居を応援してもらう手筈になつていた、と打ち明けたのも事実である。

「めざす目的がよくば」と、ドン・キホーテは言つた。「はかりごとはペテンとは申せませぬし、また申すべきでもござらぬ」

そうして、愛し合う男女が結ばれること以上にすばらしい目的はないと続け、さらにこう助言した——愛の最大の破壊者は空腹であり、抜け出せない貧乏暮らしだ。というのも愛とは喜び、楽しさ、満足にほかならないし、成就していればなおさらそうだからだ。愛にとり、困窮や貧困は正面から向かつてくる敵となる。こう言うのも、得意の技芸などにうつつを抜かさないうようなバシリオ殿に勧めたいからだ。こんなものは評判にはなつても一文にもならない。まつとうに一生懸命働いて財産を築くことに専念すべし。思慮とやる気さえあれば方法はいくらも

ある――。

「貧しき者にとり、見目麗しき娘を娶るは誉れある者たる証しでござる、もつとも貧なる者に誉れありとしてでござるが。その妻を奪うは、その者より誉れを奪ひ名を奪うにほかならず。貧乏な夫に仕えながら操の固い美しき婦人は、勝利の印たる月桂冠、勝者を表わす棕櫚の冠を戴くに値します。美しさはただそれだけで見る者、目にする者の欲をそそのめるものゆえ、その美味なる獲物を狙うて鷲や鷹どもが襲うてまいる。されど仮にこの美しさが貧乏、貧苦の中にあれば、加えて鳥やら鷹やら、肉を好むほかの卑しい鳥どもまでが群がります。かくのごとく次々攻め立てられてなお揺るがぬ妻は、まこと夫の誉れと呼ぶにふさわしいかと。よろしゅうござるか、賢明なるバシーリ才殿よ（と、ドン・キホーテは言葉を継いだ）、なんとやら申す賢者が満天下に貞女はひとりしかおらぬと言ひ、おのおのその唯一の貞女とはわが妻と思ひ定めるべし、信じるべし、さすれば満足して暮らせようほどに、と説いてござる。拙者は独り身、またこれまで妻を娶ろうと思つたこともござらぬ。されど伴侶となる婦人をばいかに探すべきかと問われれば、憚りながら愚見を申し述べるでござろう。すなわち、なにはさておき財産よりも世間の評判をば重んずべしと、かようお勧めいたします。なんとすれば、貞女はただ貞淑というだけで誉れは得られませぬ。世間の目に貞淑と映つてこそでござる。また、陰に隠れての悪事より、おおつぱらに勝手気儘いたすほうが百倍も女の名を傷つけるものでござれば。さて、淑徳ある婦人を嫁に迎えたとしなされ。その徳を保たせるはたやすうござろう。あるいはいつそう高めるさえ難しゅうないかと。されどもし性悪なおなごであれば、性根を叩き直すは骨でござろうぞ。人間、正反対に変わるなど、そうやすやすとはできませぬでう。無理とは申さぬまでも、なかなか難しいかと」

さつきからずっと主人の話が耳にはいつていたサンチョが呟いた。

「この旦那様はおらがなにか壺に嵌つた中身のあること喋ると、おめえは一人前の説教師になれるべ、気の利いた説教ぶちながら世間まわれるべ、なんちゅうのが口癖だけれど、おらに言わせれば旦那様のほうこそ格言並べたり教えを垂れたりししたら、一人前どころか二十人前ぐれえの説教師。あちこちで辻説法して拍手喝采間違

えなしだべ。てえした遍歴の騎士様だなあ！ なんとまあ学がありなさるだ！ 腹の中では騎士道のことしか知らなかんべと舐めてただけんど、どうして、なんにでも通じててひと理屈持つてなさるだ」

サンチョがなにか少し呟いたのを感じてあるじが言った。

「これ、なにをぶつぶつ申しておる？」

「別になにも。なにもぶつぶつ言つてねえですよ」と、サンチョは答えた。「ただ、今のおめえ様のお話を嫁とり前に聞いときたかったなあと、口の中でばやいてただけで。おら、今本音訊かれたら、たぶん《繋がれぬ牛は好き勝手にわが身を舐められる》と口走っちゃうで」

「テレーサはさほど悪妻か、ん？」と、ドン・キホーテ。

「飛び抜けて悪いわけでねえ」と、サンチョ。「だけんど飛び抜けてよくもねえ。まあ、とにかく、おらが望むほどよくはねえです」

「これ、感心せんぞ」と、ドン・キホーテ。「女房を悪く申してはならん。なんというてもかわいいわが子の母ではないか」

「なあに、あいこですよ」と、サンチョ。「あつちだつておらの悪口は言いてえ放題。とくに焼き餅焼いてやがるときときたら、それはもうすげえのなんのつて」

結局、新婚夫婦のところには三日いた。そのあいだ王様のようにかしずかれ、至れり尽くせりのもてなしを受けた。ドン・キホーテは例の剣客修士に、モンテシーノスの洞窟へ案内してくれる者を誰か紹介してくれるよう頼んだ。というのもぜひ奥を探検し、そのあたり一帯で囁かれている摩訶不思議な噂が事実かどうか、わが目で確かめたかったのだ。修士は従兄弟を呼ぼうと言った——名のある学者で、そのうえ騎士道物語を読むのが大好きときている。頼めば二つ返事で引き受け、洞窟の真ん前まで案内してくれる。さらにはやはりラ・マンチャ中で、いや、スペイン中ですら有名なルイデーラの湖も見せてくれるだろう——。またこうも言った——彼を道連れにすれば退屈しないだろう、なにしろ歳は若いが本を書いては貴顕への献辞をつけて出版しているような男だ

から——。というわけで、その人物が子を孕んだ若い口バを連れてやってきた。荷鞍には派手な色の敷物というか、麻布が掛けてあった。サンチョは口シナンテに鞍を置き、それから自分の口バの支度も整えると、道中袋に食べ物を詰め込んでぶら下げ、ついでに、同様に膨らんだ従兄弟の道中袋も引き受けた。こうして三人は旅の無事を天に祈ったあと、人々に別れを告げ、名高いモンテシーノスの洞窟めざして出発した。

道中ドン・キホーテは従兄弟に、どんな種類の仕事をしているのか、職業はなんで、どういう研究をしているのか、と尋ねた。問われて彼は古典学の学者と答えた——研究して成果を本にして出すのが仕事だ。どれも社会に非常に有益であり、なおかつ読んでもとても面白いものばかり。例えば『宮廷祝宴衣装総覧』と題した本では、そうした衣装が七百三通り、それぞれの色、着けるべき文句や寓意的な絵とともに載っている。宮廷の人々は祝宴や祝典に際しこの本を開いて好みのものを選んで決めればよく、自分の考えや意図に合った形にしようと他人に教えを乞うてまわったり、いわゆる〈脳味噌を搾る〉といった苦勞をする必要はない——。

「なにしろ嫉妬に悶える者であれ、恋に破れた者であれ、恋人に忘れられた者であれ、恋人と離れている者であれ、それぞれにびつたり、それこそ糊で貼るよりびつたりの格好を教えていますんで。別の著作もあります。書名は『転身物語、またはスペイン版オウイディウス』とでもするべきでしょうか。新奇かつ独創的と自負している作品で、オウイディウスを滑稽な感じにもじったもの。この中でいろいろ明らかにしています、セビーリャのヒラルダの像やサラマンカのマグダレーナ教会の天使の像がもとは誰だったか。コルドバのベシンゲーラの下水溝は、ギサンドの雄牛の石像は、シエーラ・モレーナ山脈は、マドリードのレガニートスやラバピエースの泉は……。もちろん同じマドリードのピオーホ、カニョ・ドラード、プリオーラなどの泉も忘れていません。また、おのおのについてその寓意、含意、暗示するところも説明してありますんで、読めば一石三鳥、楽しいし、わくわくするし、ためにもなります。別にもう一冊書きかけていて、これは『ヴィルジリオ・ポリドーロ著〈事物起源考〉への補遺』と題しています。知識と研究成果のぎゅっと詰まった本です。なにしろ極めて重要な事例でポリドーロの本から漏れているやつを考証し、結果を格調高い文章で綴ったものですんで。例えばポリドーロは世

界の風邪引き第一号は誰かとか、最初に水銀軟膏を塗って治癒を試みた梅毒持ちは何某とか述べていません。わたしはこれらを文字どおり明らかにしています、二十五人を超える著者を引き合いに出して立証して。ご一読いただければいかにわたしが精魂を傾けたか、そしてこの本がどれほどの人の役に立つかわかりになりますよ」

従兄弟の能書きにじっと耳を傾けていたサンチョが話しかけた。

「書きなさる本が出て大当たりするとええですがね。ところでおめえ様、言えなさるかね？ それはもう言えなさるべね。なにせ物知り博士様だでね。世界で初めて頭を搔えたのは誰ですが？ おら、人間のご先祖様のアダムにちげえなかんべと睨んでるだけんど」

「それはそうでしょうね」と、従兄弟。「だってアダムに頭や髪の毛があったのはわかりきった話だから。だとすると、世界で最初の人間である彼が頭を搔くことだってあったでしょう」

「そいつはおらと同じ考えで」と、サンチョ。「だったら今度はこれは？ 世界で初めて軽業したのは？」

「さあ」と、従兄弟。「正直言つてただちに誰とは断言しかねるなあ。調べてみないと。帰ったら蔵書の置いてある部屋へいつて調べてみましょう。この次会つたときにでも教えてあげますよ。これきりのご縁じゃないだろうから」

「だったら、ほれ、おめえ様」と、サンチョ。「手間隙かけるにはおよばねえ。たつた今ぱつと閃いたがすよ、お尋ねしたことの答えが。ええかね？、世界で初めて軽業したのはルキフェルのやつだべ。天国から追つ払われたとき、つまりは叩き落とされたとき、くるくるまわりながら地獄へ落ちたでね」

「なるほど一理あるなあ」と、従兄弟は感心した。一方ドン・キホーテは言つた。

「これ、その問いも答えも自分の思いつきでうて、どこぞで聞いたもんじゃろう」

「まさか。なに言いなさるだ」と、サンチョは口を尖らせた。「おらに本気で自問自答させてみなせえまし。請け合つてもええだ、今からあしたの朝までネタ切れしねえべ。そうだがすとも、くだらねえ疑問思いついて馬鹿馬鹿しい答えみつけるとなつたら、おら、他人の知恵なんて借りてまわる必要ねえ」

「ほう、無学なわりによいことを申した」と、ドン・キホーテ。「世の中には、調べてわかったところでまったく知識にも勉強にもならんことを、ご苦労にも調べよう、つきとめようとする人々があるでろう」

そんなこんな傑作なやりとりのうちにその日は暮れた。その夜三人は小さな村で一泊した。そこで従兄弟はドン・キホーテに、モンテシーノスの洞窟まではあとせいぜい二レグアばかりだが、もしも本当に探検するつもりなら綱を用意していったほうがいい、体を縛って深いところへ降りるのに使うから、と助言した。ドン・キホーテは、たとえ行き着く先が地獄だろうと底まで降りて見届けずにはおかないと見得を切った。というわけで彼らは綱を百ブラーサばかり買い求めた。洞窟に到着したのは翌日の午後二時頃である。洞窟の入り口は広くて大きかったものの、茨や無花果や木苺や雑草だらけ。繁茂し絡まり合うそれらにすっかり覆われ、塞がってしまった。入り口が見えるところまでくると、従兄弟とドン・キホーテとサンチョは地面に降り立った。さつそく従兄弟とサンチョはドン・キホーテを綱で固く縛った。そうやって綱を掛けたり巻きつけたりするあいだ、サンチョが話しかけた。

「ええかね、おめえ様、気をつけていきなせえましよ。生き埋めや宙ぶらりん——井戸に吊って冷やしてるビンみてえになつてはいけねえがすよ。まったく、なんのわけやいわれがあつてこんな洞窟探検なんかしなさるか。地下牢よりひでえにきまつてるべえに」

「黙って縛れ」と、ドン・キホーテ。「かくのごとき大仕事はのう、よいか、まさしくわがために用意されたものなんじゃ」

このとき、案内人である従兄弟が言った。

「お願いします、ドン・キホーテさん。よく見てきてください。目を皿にしてあつちの、中の様子を観察なさってください。おそらくわたしの『転身物語』に書けるようなものがあるでしょうからね」

《餅は餅屋》でがすよ」と、サンチョ・パンサ。

こんなやりとりをしながら、やがて綱を縛りおえた（ちなみに綱は鎧の上からではなく、鎧下着の上から縛つ

た)。ドン・キホーテが言った。

「うっかりして小さな鈴を用意するのを忘れてしまった。この綱の体に近いところにつけておけば、音でまだ降りておるとか生きておるとか知れるんじゃない。まあ、いまさう言うても詮ない。運を天に任せ、よしなお導きいただくほかない」

それからドン・キホーテはひざまずくと低い声で、どうやらこれは生死を賭けた類いなき冒険となる様子、助けたまえ、よき首尾を得させたまえと、そう念じつつ天に祈りを捧げた。それが済むと今度は声高に言った。

「ああ、わが身と心のおんあるじ、令名このうえなく高き三国一のドウルシネア・デル・トボーソ姫よ！ 御身に焦がれるこの果報者が祈願の声のお耳に達することあらば、その類いなき美貌にかけてなにとぞお聞き届けくだされ。そは余の儀にあらず、拙者へのお力添え、ご加護をば拒みたもうなということ、今こそのうてはならぬものでござれば。拙者、これに口をあけたる深き穴へ飛び込み、下つて奥底へ至る所存。ひとえに世に知らしめんがためでござる、ひとたび御身のご加護を得んか、拙者、水火も辞せず突き進み、なにごともしとげると」
こう言うただちに穴の縁へ歩み寄った。しかし藪を手で掻き分けるか剣で払うかしなければ、下へ降りるところか身を入れるのさえ無理とわかった。そこで彼は剣を抜き、洞窟の入り口に生い茂る草木を切り払いだした。ばつさばつさとただならぬ物音がするのに驚き、おそろしく大きな渡り鳥や紅嘴鳥べはしが中から無数に飛び出した。黒い塊がわつときたものだから、ドン・キホーテはたまらず地面に尻餅をついた。もしも彼がカトリックの教えと同じぐらい迷信を信じる人間であれば、それを不吉と見做し、そんな場所に降りていくのを思い留まつたらう。やがてドン・キホーテは立ちあがり、もう鳥も、あるいは鳥の中に混じっていた蝙蝠などの夜鳥も出てこないのを確かめると、従兄弟とサンチョに綱を繰り出させながら不気味な洞窟の底へと降りていった。身を入れたとき、サンチョは彼に向かつて何度も十字を切りつつ無事を祈つて言った。

「遍歴の騎士道の華で、より抜き、えり抜きの遍歴の騎士様よ、神様、ペニャ・デ・フランシア様、ガエータの三位一体様のお導きがありますように！ いざ、おいきなせえまし、鋼の心、鉄の腕、天下一の豪傑様よ！ 念

を入れとくだ、どうか神様のお導きがありますように！そして息災で、自由の身で、身代金の約束なんかしねえで帰ってこられますように、進んで暗闇にへえるため後にしなざるこの世界の光の中に！」

従兄弟もほぼ同様の祈り、願掛けを行なった。

ドン・キホーテは、綱を繰り出せ、もっと、と叫びながら降りていった。二人は徐々に繰り出していき、やがて洞窟の奥から響いていた声が聞こえなくなった頃には、すでに百ブラーサ使い切っていた。二人はもはや綱に余裕がない以上引き上げにかかったほうがいいと思つたが、ひとまず半時間ばかり待つてみた。やがて綱を手繰りはじめた。なんの重みもなく楽々とやれた。これからして、ドン・キホーテは下に残つたままと考えざるをえなかった。そう信じたサンチョは悲しくなつて泣き出し、確かめようと無我夢中で綱を手繰つた。だが八十ブラーサあまり手繰つたかと思う頃、二人は手応えを感じ、ともに大喜びした。やがて残り十ブラーサになったとき、ドン・キホーテの姿がはつきり見えてきた。サンチョはあるじに向かい、こう叫んだ。

「旦那様、お帰りなせえまし。もうあつちに居着きなさるつもりかと、心配になりかけてたがすよ」

ところがドン・キホーテからはひと言も返つてこなかった。すっかり引き上げたあとと見てみると、目を閉じて眠っている様子だつた。地面に寝かせて綱をほどいてやつたが、相変わらずである。必死で二人は体の向きをあれこれ変えたり、体を揺すったり揺さぶったりした。するとだいたいぶ経つてからようやく正気づき、まさに深い深い眠りから覚めたあとのように伸びをした。それから、驚いたような顔であたりをきよろきよろ見まわして言つた。

「やれやれ、余計な世話を焼いてくれた。せつかくこれまで誰も味おうたことのない楽しい日々を過ごし、なんびとも見ぬ甘美なる眺めを堪能しておつたに、引き摺り出されてしまったわい。今こそ身に染みてわかつた、この世の幸せはどれも夢まぼろし、野の花のごとくはかないこのう。ああ、悲運のモンテシーノスよ！ああ、深手負いしドウランダールテよ！ああ、あわれなるベレルマよ！ああ、涙に暮れるグアデアーナよ、そうして汝らルイデーラの娘達、その美しき眼より流せし涙をば湖面に湛える薄幸の乙女らよ！」

これをドン・キホーテがとても苦しげに、まるで腸から絞出すように言うのを、従兄弟とサンチョは興味

津々で聴いていた。二人は今の言葉の意味を説明して欲しい、あの奈落の底でなにを見たか聞かせてもらいたいとせがんだ。

「奈落の底じゃと？」と、ドン・キホーテは言った。「なにが奈落なものか。似ても似つかぬわ。今にわかつうが」彼は、腹が減つてたまらないからなにか食べさせてくれ、と頼んだ。そこで従兄弟が荷鞍に掛けていた麻布が青草の上に広げられ、道中袋の中身が取り出された。それから三人車座になって和氣藹々とおやつ兼夕食を食べた。やがて麻布が片づけられると、ドン・キホーテ・デ・ラ・マンチャは言った。

「されば兩人とも座つたままにて、さあ、こちらへ耳をお貸しなされよ」

第二十三章

知勇兼備のドン・キホーテが、モンテシーノスの奥深い洞窟で見たと語つた驚嘆すべき事柄の数々。しかしながらそれが想像を超えた途方もない話であるため、この冒険は嘘と考えられている。

時刻は午後の四時頃だつたろうか。太陽が雲に陰り日差しが弱く穏やかだつたおかげで、ドン・キホーテは暑さにうたらず、モンテシーノスの洞窟での見聞について二箇所のご清聴を賜うことができた。彼は次のように語りだした。

「この穴を身の丈十と二つから四つ分ほど降りてゆくと、右手に大きな窪みがあつた。大型の馬車がラバごとはいろつかという広さでの。そこには遙か上の地表にあいた割れ目あるいは裂け目より、かすかに光がはいつてきておつた。この大きな窪みをみつけたとき、拙者、綱にて吊り下げられ、いづこへ着くやら知りもわかりもせぬままあの暗き中を降りてゆくに、疲れてもおれはうんざりもしておつた。さればそこへはいつてひと息入れる

ことにいたした。そこで上へ向かい、こちらが言うまで綱を繰り出すを一旦やめるよう叫んだのじゃが、どうやら聞こえなんだ様子。そこで、下ろされてくる綱を手繰っては輪にして積み重ね、しかるのちその上に腰を下ろして頭を挫った、もはや上から吊り下ろしてもらえぬに、いかにして底へ降りてゆこうかと思ひ悩んでじゃ。かように頭を抱え途方に暮れておるうち、思わず知らず不意に深い深い眠りに引き込まれた。そうしてなにがどうなったものやらまた急に目が覚めると、そこは野原の真ん中。それはそれは美しく心地よい悦楽の園での、まさしく造化の妙、人智のおよばぬ桃源郷であつた。拙者、目をこすり頬をつねつてみて、夢を見ておるのではない、確かに起きておるとわかつた。されどなお頭やら胸やらを触り、そこにおるがおのれか、それとも本物のおのれならぬ実体なき幻影か確かめてみた。じゃが触り触られる感覚があり、また心の内に巡らす考えにも筋が通つておつて、そのときそこにおつたは、今ここにこうしておる拙者と同じ者と悟つた。

まもなく目に映つたは、壮麗なる王宮と言うべきか城と言うべきか。どうやら塀や壁は清く透き通つた水晶でできておるらしい。見ておると大手門が左右に開き、中から威厳ある老翁が現われこちらへまいる。紫のフランネルのマントを着用し、長い裾を引き摺つておつた。緑のサテンの学生懸章を両肩に懸けて胸の前へ垂らし、頭にはまるい黒の縁なし帽を被り、真つ白なひげが腰の下まで垂れておる。丸腰での。手にはロザリオを持つておつたが、その小珠は並みの胡桃以上の大きさ、大珠もまた並みの駝鳥の卵に劣らぬほど。老人の風貌、歩み、威厳、品格、そのいちいちに感服いたし、そのすべてが一体となつた姿に圧倒された。老人は拙者の前にまいつてまず固く抱擁し、しかるのち申した。

『ドン・キホーテ・デ・ラ・マンチャ、勇猛なる騎士よ、魔法にかけられこの人外境にあるわれら、汝をば久しく待ちわびたり。世に知らしめよ、汝のきたりしこのモンテシーノスの名冠する深き洞穴が、なにを秘め隠しておるか。これはまさしく拔山蓋世の英雄たる汝に挙げせんがためとりおかれたる手柄なり。いざともにまいれ、雷名天下に轟く騎士よ、これなる水晶の城が内に秘める不思議をば見せようほどに。われは終身の城代なり城守なり。すなわちわれこそはモンテシーノス、洞窟の名の由来となりし者なり』

名を聞いてただちに、此方^{こなた}、地の^こ上、娑婆世界にて語られる話はまことなりや、と尋ねた、貴殿は刎頸の友たるドウランダールテがいまわの際に残せし言葉に従い、小さき両刃の短剣にて胸開いて心の臓をば抉りとり、ベレルマ姫が許へ持参なされたと承知するが、と申して。すると、すべてまことなり、ただひとつ違ふは、使うたは両刃にあらず、小さくもあらず、切っ先が錐より尖りし脇差しなりと、さようお答えなされた」

「そんな鋭い脇差しちゅうと」と、ここでサンチョが口を挟んだ。「セビーリヤのラモン・デ・オセスの鍛えた業物にちげえなかんべ」

「どうじゃろうのう」と、ドン・キホーテ。「まあ、そうではあるまい。ラモン・デ・オセスはついきのうまで生きておった人物じゃが、この悲劇の起こったロンセスバリーエスの故事は大昔の話じゃでう。ともあれかような詮索なぞどうでもよい。これで物語の真実が変わったり、流れが違つてきたりするわけではない」

「おっしゃるとおりです」と、従兄弟。「さあ、ドン・キホーテさん、先をお願いします。聴いててわくわくどきどき、もうたまりませんよ」

「話しておる拙者として同じでござる」と、ドン・キホーテ。「さて、かくなるしだいにてモンテシーノス翁に連れられ水晶宮にはいり、一階の広間へ通された。総雪花石膏作りで、それはそれは涼しい部屋じゃ。見ればまこと見事なる作りの大理石の墓が据えられ、上に一人の騎士が長々と横たわつておった。いやいや、墓にようある青銅やら大理石やら碧玉やらの像ではない。本物の生身の人間じゃ。左胸の上に置いた右手、わが目にはちと毛深く筋張つて見えたが、これは当人が大力たる証拠。モンテシーノス翁は拙者が墓の上の人物に目を奪われ呆然としておるを見て、まだなにも訊かぬ前にこう申された。

『これなるはわが友ドウランダールテ、かつて婦人へ愛を捧げし勇士は数々あれど、その華にして鑑であつた騎士でござる。それがしはじめかのあまたの男女と同じく、マリーン——悪魔の子とやら申すかのフランスの魔法使いの術にかかり、ここに閉じ込められております。もつとも、思うにあれは悪魔の子にあらずして、俗に言う悪魔の上前はねるしたたか者。マリーンめがいかに、なにゆえわれらに魔法をかけたかは謎なれど、時が経

てばわかってまいりましょう、さだめてさほど遠からぬ先に。されどひとつ不思議がござる。ドウランダーテがわが腕に抱かれて死に、この手にて遺骸より心の臓をとり出したは、それがし、今が昼間であると同じほどしかと存じおること。まこと重さは二リブラもあつたであらうか。それもそのはず、博物学にて心の臓大なる者は勇に優り、小なる者は劣ると申すゆえ。かような次第にて、これなる騎士の死んだが事実なれば、なにゆえ生けるがごとく今もときおり嘆き悲しむのでござらう?』

モンテシーノス翁の言葉が終わるや、哀れなるドウランダーテがひと声叫び、こう申した。

『ああ、モンテシーノス、わが血族よ、

末期の頼みぞ、聴けよかし。

われ死して

魂、体を離れなば、

脇差しよし、

両刃の短剣またよし、

わが心の臓をばとりいだし

いざいざ届けよ、ベレルマが許へ』

それを聞くとモンテシーノス翁は深き傷負うた騎士の前にひざまずき、目に涙を浮かべて申された。

『お聴きあれ、ドウランダーテ殿、かけがえなきわが血族よ。負けいくさの憂き目に遭うたかの悪しき日、遺言は果たしましたぞ。心の臓をば僅かも胸に残さずなるだけ丁寧に抜きとり、レースのハンカチで拭うたのち、身に携えフランス目指し急ぎ発つてござる。出立前、深き穴掘り貴殿を埋めるとき滂沱と流れ出た涙は、手を洗うに、体内をまさぐってついた血を落とすに足るほどでござつた。さらに事の次第を詳しく述べれば、死んでしまったわが血族よ、ロンセスパリーエスを発つて最初に通りがかつた村で貴殿の心の臓に塩を少々振り申した、臭うてまいらぬよう、生肉のままは無理でもせめて干し肉にしてベレルマ姫が御許へ持参いたさんと存じ。姫は

魔法使いマーリンの術にて久しくこれに留め置かれてござる、それがしや貴殿、はたまた貴殿がご家来のグアデアーナ、老女ルイデーラとその七人の娘および血族の娘二人、そのほか貴殿のあまたの友人知己らとともに。流れし歳月は五百有余年、されどいまだ一人として死する者なし。ただルイデーラ親子とその血族の娘らだけがこれにおらぬは、あまりに嘆き悲しむためさしものマーリンも哀れを催したか、ひとりひとりを湖に変えたゆえ。これらは今日娑婆のラ・マンチャ県にて、ひとまとめにルイデーラの湖と呼ばれてござる。うち七つはスペイン国王がもの。血族の娘二人が変じたは聖ヨハネの名冠するまこと尊き騎士団がもの。

貴殿のご家来のグアデアーナもあるじが不運に泣きの涙、ためにその名で呼ばれる川に変えられてござる。グアデアーナは地表に出て、別世界の天に輝く日輪をば仰ぎ見たとき、貴殿を残してまいったことが頭に浮かび、悲しみ胸に迫りて今一度地の底へ潜り申した。されどさすがに自然の流れには逆らえず、ときおり現われ、天日や人の目におのが身を晒しております。水はくだんの湖より受けてござる。グアデアーナはこの水とほかよりあまた注ぎ入る水にて、滔々と流れる大河となつてポルトガルに至ります。されども、しかれども、いずこを流れるときも憂い悲しみをば湛え、またおのが内にて高級、美味なる魚育むを誇るどころか、産するは下等でまずい魚ばかり。黄金の川タホとは雲泥の差にて。今申しておるもろもろは、ああ、わが血族よ、いくたび貴殿に繰り返したか。されどついぞ返事は返つてまいらぬ。察するにそれがしを信用なされておらぬか、わが言葉が聞こえぬかでござるが、それが真実つろうてなりませぬ。されど今日は朗報あり。お聞きなされば、たとえ苦しみはやわらぐずとも決して増しますまい。ほれ、これに、お傍におわす。眼を開いてごろうじろ。魔法使いマーリンがさまざま予言いたした、かの天下無双の騎士でござる。かのドン・キホーテ・デ・ラ・マンチャでござる。すなわち、とうに忘れ去られた遍歴の騎士道をば新たに今の世に蘇らせたばかりか、往事に優る大輪の花として咲かせた豪傑。もし味方について助太刀くだされば、われら魔法が解けるやもしれませぬ。偉大なる勲しは、偉大なる人物がため用意されておるものでござれば』

『それが駄目でも』と、このとき手負いのドウランダールテが力のない低い声で呟いた。『もしそれが駄目でも、

ああ、わが血族よ、さあ《自棄^{やけ}にならずカードを切つてもうひと勝負》

これだけ申すところりと背を向け、またふだんのごとく口を嚙み、もはやひと言も喋らなんだ。と、にわかには大声で泣き叫ぶ声が聞こえてまいった。さらには腸^{はらわた}より搾り出すごとく呻きと、苦しげなすすり泣きも。振り返ると水晶の壁越しに、世にも美しい乙女らが広間を二列に並んで通つてゆくのが見えた。いずれも喪服姿で、頭にはトルコ風に白いターバンを巻いておつた。列のしんがり、最後には、その貫禄からしてあるじらしきひとりの婦人。やはり黒衣に白いターバンというなりであつたが、そのターバンからは布が長く垂れ地面に届いておつた。またずいぶん大きなターバンでの、ほかの乙女らの被るうちもつとも大きなターバンの倍もあつた。婦人の顔は左右の眉が繋がり、やや鼻べちや。大口なれど唇は赤い。ときおり剥き出しておつた歯は透き歯で乱杭歯、色こそ皮を剥いたアーモンドのごとく白いが。両手に広げた薄い麻布の上に載つておるは、遠目に見たところ心の臓の干物らしい、なにせ干からびて皺が寄つておつたゆえ。モンテシーノス翁はかよう申された——あの列をなして歩く者らはいずれもドウランダー^{わくら}ルテとベレルマ姫が侍女にて、あるじら同様ここに魔法で閉じ込められておる。両手に広げた麻布の上に心の臓を捧げ持ち、皆のあとよりまいるはベレルマ姫。侍女らとともに週に四日あのように練り歩き、ドウランダー^{わくら}ルテの骸^{むくろ}と悲しみに満ちた心の臓に向かい挽歌を歌うておる、いや、と申すより挽歌を泣いておる、また貴殿の目にはちとおかめと、すなわちさほど美人にあらず、評判倒れと映つたやもしれぬが、それは魔法により日夜苦しんでおるせい。目のまわりの大きな隈や顔色の悪さがその証しなり——。さらに翁は続けて、

『顔色も隈もおなごの月の障りとは関わりござらぬ。なぜならさようなもの、何ヶ月どころか何年もない。門口からちらとも顔を覗かせぬ。あれはどちらも、手に捧げ持つて離さぬあの心の臓を見て悲しみが胸に迫るゆえにほかならず。目を遣るたび、夭折した恋人の哀れが心に蘇り、思いが新たになるのでござる。さもなくばまことは美貌、気品、気高さにて天下のドウルシネーア・デル・トボーソ姫すらかろうじて比肩できようかというお方。ドウルシネーア姫と申せば、近郷のみならず満天下にて賞賛せぬ者なき名花でござるが』

『お控えあれ、ドン・モンテシーノス殿』と、拙者、それを聞いて遮った。『話をなさるにも礼儀がござろう。重々ご承知のごとく、なんによらず比べられるは癪に障るもの。されば人同士を比べるは無用になされよ。三国一のドウルシネーア姫はドウルシネーア姫、ドニャ・ベレルマ姫は昔からずっと変わらずドニャ・ベレルマ姫、それでよいではござらぬか』

すると翁はかようお答えなされた。

『ドン・キホーテ殿、お赦しあれ。認めましょう。失言でござった。ドウルシネーア姫がベレルマ姫にかろうじて比肩するなど申したは無礼。それがし、うすうす貴殿がかの姫に心捧げる騎士と気づいておつたに、つい口を滑らせ比べてしもうた、天女とならばともかくほかの女性と』

拙者、わが姫がベレルマ姫と比べられるを聞いてどきりとしたものの、モンテシーノス殿ほどの傑物に詫びを言われ心が静まり申した」

「それでも、おら、びつくりでがすよ」と、サンチョが言つた。「おめえ様、よくまあその老いばれに飛びかかつて蹴りまくり、体中の骨を砕きなさらなかつただ。ヒゲだつて一本残らずむしつてもおかしくなかつたべえに」
「さあ、そうはまいらんのじゃ」と、ドン・キホーテ。「わしやそりやできん。たとえ相手が騎士でも老人を敬うは人の道。これが騎士で、しかも魔法にかかつておるとなればなおさらじゃ。それにほかにもあれこれ問答いたしたが、そこではお互い無礼を申さなんだは確かじゃでのう」

このとき従兄弟が口を開いた。

「ドン・キホーテさん、不思議ですねえ、實際そうやつてほんの短い時間洞窟の中にいただけなのに、そんなにいろいろ見たり、あれこれ言葉を交わしたりなさつたなんて」

「下へ降りたはいかほど前でござつたかの？」と、ドン・キホーテが訊くと、

「二時間とちいと前で」と、サンチョが答えた。

「馬鹿を申せ」と、ドン・キホーテ。「あちらにおるあいだ暮れて明け、暮れて明けること三度におよんだのじゃぞ。

すなわち人間界を遠く離れ人の目に触れぬあの場所に、三日おった勘定になるではないか」

「旦那様の言葉に嘘はねえべ」と、サンチヨ。「今まで旦那様の身に起こったことはどれも魔法の仕業。だで、たぶん娑婆の一時間が向こうでは三日三晩に感じられるたべよ」

「そういうことじゃろうのう」と、ドン・キホーテ。

「で、ドン・キホーテさん、そのあいだなにか口になさいましたか？」と、従兄弟。

「いえ、ひと口も」と、ドン・キホーテ。「まず腹が減りませぬ、いや少しも」

「では魔法にかかった人達は？ ものは食べるんですか？」と、従兄弟。

「食べませぬし、大のほうもしませぬ」と、ドン・キホーテ。「もつとも爪やヒゲや髪は伸びるとかいいう話でござるが」

「ひよつとしておめえ様、その魔法にかかった人達は眠るかね？」と、サンチヨ。

「いや、いっこうに」と、ドン・キホーテ。「少なくともわしがともにおったこの三日のあいだ、誰も瞼を閉じないんだ。わしとて同じじゃ」

「だったら諺がぴったり合うだ。《朱に交われれば赤くなる》と、サンチヨ。「おめえ様は、魔法にかかって食いも眠りもしねえ人達といなさっただ。そのあいだおんなじようになつたとしても、別に変でなかんべよ。ちゆうても、こんなこと言つて申しわけねえけど、旦那様よ、今聞いた話をちいとも信じるようなら、おら、神様……でなくて悪魔にさらわれようが文句ねえ」

「なぜです？」と、従兄弟。「じゃあドン・キホーテさんが嘘をついているとでも？ たとえそうしたくてもこれだけの嘘八百、考えたりでつちあげたりする暇なんありませんでしたよ」

「おら、旦那様が嘘つきだとは思わねえ」と、サンチヨ。

「では、なんじゃ？」とドン・キホーテが問うと、

「あのマリーンか、ほかの魔法使えどものせいと思うだ。おめえ様があっち、地の底で見たとか話したとか言い

なさる人達全部に魔法をかけたやつらです。こいつらがおめえ様のおつむだにそんな絵空事吹き込みやがったでねえかと。今話しなされたことやら、話し残してなさることやら全部」

「なるほど、それはあつても全然おかしいうはなからうが」と、ドン・キホーテ。「されどこれは違うぞ。なにせ今話したはわが目で見、わが手で触れたものばかり。ところでこの話はどうか？ モンテシーノス翁に見せられたこと、不思議はほかにも数えきれんぐらいあつて、この場でいちどきに話すわけにはまいらんで、道中折りにふれおいおい聞かせるつもりじゃが……。あれはえもいわれん心地よい野であつた。そこで翁が示す先に目を遣ると、三人の百姓女が山羊のごとく跳び跳ねておつた。わしゃひと目見るなり、ひとりとは三国一のドウルシネーア・デル・トボーソ姫とわかつた。あとの二人は紛れもない、姫にお付き添い申しておつたあの百姓女ども。ほれ、トボーソの外れで会つたであろう？ わしゃモンテシーノス翁に向かい、あの三人をこ存じかと尋ねた。翁が答えて申されるには、知らぬが、思うに魔法にかけられたいずこかのやんごとなき婦人に相違なし。この野に姿を現わしたはつい近頃。されど驚くにはあたらず、なぜならここにはほかにも古今の婦人らが魔法にてさまざま奇妙な姿に変えられ大勢まいつておるゆえ。中でそれがしの知るはギネビア王妃とキンタニョーナ——《ブルターニユより／はるばると》きたりしランスロットに酌をしたあの老女じゃ、と」

サンチョ・パンサはあるじがこう言うのを聞いて、あまりのおかしさに気が変になるか、笑い死にしようのではないかと思つた。なにせ彼はドウルシネーアに「術」をかけ、かつあとして言い張つた張本人であり、実は魔法もなにもないと知つていたからだ。これでサンチョは、主人が正氣のかけらもない完全な狂人になつたと確信するに至り、そこでこう言つた。

「敬愛するあるじ様よ、あつちの世界へ降りていきなされたはええけんど、折りもまずければ時も悪いし日も厄日。そのうえモンテシーノス旦那に会つたのも、よくねえ時間だつたがすねえ、こんなさまで帰つてきなされた。こっち、上にいなされたときはなんでもねえ。正氣も正氣、生まれついたまんま。しよつちゆう格言やら教えやら口にしてなさつたちゆうに、今はすっかり変わつちまつて、とんでもねえひでえ与太ばかり飛ばしてな

さるだ」

「わしゃのう、サンチヨ」と、ドン・キホーテ。「そちを知っておるゆえ、なにを言おうが相手にせんことにしておるんじゃ」

「こつちだつておめえ様の話は本気にしねえ」と、サンチヨ。「こう言つたせいでぶん殴られようがぶつ殺されようがかまわねえ。間違えねえ、話したとおりと意地を張りなさるだつたら、もつと言わせてもらうつもりでがす。それにしても、おめえ様よ、まだ今のうちは静かにお話しできるでお尋ねするけれど、なんで、どんなところで見分けがついたでがす、おら達のお仕えするお姫様だと？ ひよつとして話しかけなかつたなら、なんて？ それであつちはどう答えなかつただね？」

「見分けがついたは」と、ドン・キホーテ。「そちが姫を示してみせたときと同じお姿じゃつたからじゃ。わしゃ姫に声をおかけ申した。ところがなにもお答えにならん。それどころかくりと背を向けお逃げあそばした。それはもうたいへんな速さでの、矢も追いつかんほどであつたぞ。わしゃあとを追おうとしたものの、モンテシーノス翁から、どうせ追いつけんゆえ無駄骨を折るはやめにしたがい、それにそろそろ洞窟を去るべきときじやと止められ諦めた。翁はまたこう申された、いずれ自分やベレルマやドウランダーレ、そのほかここにおる面々の魔法を解く術がわしに告げられようと。」

されどのう、わしゃかしこにてさまさま見聞きいたしたが、あのときほど心傷んだことはなかつたぞ。かような話をモンテシーノス翁より聴いておる最中じゃ、お気の毒なるドルシネア姫の連れの侍女二人のうちひとり、いつのまにやら一方より寄つてまいり、目に涙を溜めかぼそき声にてきまり悪げにこう申したんじや。

『あるじドルシネア・デル・トボソ、御手に接吻しお願い申します、つつがなくおわすや、なにとぞお知らせくださりませと。また赤貧洗うがごときありさまにて、藁にも縋る思いでかくも願ひおります、これのように持参いたせし新品の木綿のペチコート、これをば抵当に六レアル、あるいはお持ち合わせの分なりとどうかご融通いただけませぬか、誓うてすぐにお返し申しませうゆえと』

わしやかような使いの口上を聞いてびっくり仰天、思わずモンテシーノス翁のほうを向いて尋ねた。

『モンテシーノス殿、はて面妖なこと。魔法にかけられたやんごとなき人々が金に困りまするか?』

すると翁はお答えなされた。

『まことの話、ドン・キホーテ・デ・ラ・マンチャ殿よ、この貧乏神と申すもの、いずこにても珍しからず。至るところへ出向き、誰も逃しませぬ。魔法にかかった者として容赦なし。ドウルシネーア・デル・トボーソ姫が使いを送り、六レアルご希望でござる。見たところ抵当^{かた}の品も悪うない。お貸し申さぬ理由はござるまい。これはもうよほど困つておいでに相違ない』

『抵当は不要でござるが、お望みの額だけお渡しもできませんぬ。あいにく手持ちが四レアルしかござらねば』

わしやそう答え、使いに金を手渡した。サンチヨ、あの金じゃ。このあいだそちに渡されたであらう、貧しき者らに道中で出会ったとき恵むようにと? それからわしや使いにこう言づていたした。

『ご使者殿、あるじの姫にお伝えくだされ、姫のお苦しみはわが苦しみ、なろうことなら豪商フツガーともなつてお救い申したき思いと。また、こうもお伝えくだされよ、姫が麗しきお姿拝し賢きお言葉伺うておらねば、拙者、健やかなることあたわず、健やかにてあるはずもなしとご承知おきくだされ。よつて伏してお頼みいたします、なにとぞ姫が囚われ人にして僕——うちひしがれたる拙者めにご拝顔の榮を賜わり、言葉をお掛け申すをお許しあれ、との。加えてこれもお伝え願わしゅう。その昔マントバ侯爵は、命尽きんとする甥のボードワンを山中にてみつけその仇討ちをば決意せしとき、思いを遂げるまで美食せぬをはじめもろの誓いをいたした。姫はいつか思つてもみぬとき、拙者がこのマントバ侯爵流の誓いを立てたとの風説をば耳になされようと。つまり拙者、姫の魔法をお解き申すまで、ポルトガルのドン・ペドロ王子もおよばぬほどくまなく天下中を旅し片時も休まぬと、さようお誓いいたす所存でござる』

『わがあるじに対し、それぐらいなされるはあたりまえ。もつとなされてもよろしいかと』

そう答えると侍女は四レアルを受けとり、頭を下げるかわり二バラほども宙に飛びあがつてくるりととんば

返りいたした」

「あれまあ、なんちゆうことだべー」と、それを聞いてサンチョが大声をあげた。「こんな話が世の中にあるものだべか？　そこまで魔法使えだの魔法だのがこの世で力を揮ってるかね、旦那様のちゃんとしたおつむ、こんなにめちやくちや狂わせちまつて！　ああ、旦那様、旦那様よう、お願えするですよ、自分を、え、せつにしながらねば。他人に啜^{ひと}われてはいけねえ。そんな絵空事、本当と思ひ込んで駄目だ。馬鹿な思ひ込みで、頭がおかしくなつてなさるですすよ」

「ふむ、忠なるがゆえの諫めとは思ふが」と、ドン・キホーテ。「なにせそちやまた世の中の物事に通じん。それゆえ少しでも信じがたきことを聞けば、すぐにありえんと片づけてしまふ癖がある。じゃがいつぞやも言うたとおり、時が経つうちわかつてこよう。これからあの地の底での見聞のうちより話してゆくつもりじゃが、それを聞けばいづれ今の話を信じざるをえまい。なにせあれは異論も反論も挟む余地なき事実じゃでう」

第二十四章

本筋とは関係のない些事ながら、この大武勇伝の真の理解に不可欠な事実があまた語られる。

原著者シデ・アメーテ・ベネンヘーリの手書きの原本をもとにこの大武勇伝を翻訳した人物は、モンテシーノスの洞窟の冒険の章に至ったとき、その余白にアメーテ自身の手による次のような書き込みをみつけたと言う。

「以上、本章で記した内容がすべてそのとおり豪傑ドン・キホーテの身に起こつたなど、わたしには合点も納得もいかない。というのは、これ以前の冒険は現実にあつたとしてもおかしくないものばかりだが、この洞窟の冒険だけは理性が受け入れられる範囲からあまりにかけ離れていて、どう考えても事実とは信じ難いためである。

しかし、だからといってドン・キホーテが嘘をついたとは考えられない。なにしろ彼は至誠の郷士、高潔な騎士として当時並びない人物である。たとえ射殺されても嘘などつかなかったにちがいない。さらに言えば、あのとおり彼の語った話は詳細を極めており、あれだけ短時間にあんな嘘八百を考えつくのは不可能であろう。それにこの冒険譚が眉唾物と思われたところで、こちらの責任ではない。だから話を本当だとも嘘だとも決めつけず、ともかく書いておく。賢明なる読者よ、あとはご随意にご判断願いたい。わたしはそれ以上するべきではないし、またできない。ただし死の間際、いよいよというときになって本人がこの話を撤回した、つまりあれば作り話だった、いかにも愛する騎士道物語で読んだ冒険譚的でいいと感じたのだと告白した——という噂があるのもまた事実と信じられている」

さて、伝記は以下のように続く。

従兄弟にとつてサンチョ・パンサの無遠慮さは驚きだったが、一方、ドン・キホーテが怒りださないのも意外であつた。彼はこれについて、魔法で変わり果てた姿だったとはいえ、憧れのドウルシネア・デル・トボーソ姫を目にした嬉しさから心がなごみ、それがこうした態度となつて現われているのだらうと解釈した。なるほどそうでなければサンチョはぶちのめされても文句を言えないほど、ずけずけものを言つた。いくらなんでも主人に対して無礼すぎると、ほんとうにひやひやするぐらいだったのだ。従兄弟はドン・キホーテに話しかけた。

「わたしはねえ、ドン・キホーテ・デ・ラ・マンチャさん、今度の旅にお供できて実に有益だったと喜んでるんですよ。四つほど収穫がありましたからね。まずはあなたという方とお知り合いになれたこと。こんな幸せはありません。次はこのモンテシーノスの洞窟になが秘められているかわかり、かつ、グアデアーナ川やルイデーラの湖にまつわる変身の話が聞けたこと。執筆中の『スペイン版オウイディウス』にとつて格好の材料になるでしょう。三つ目はカード遊びの古さがわかつたこと。モンテシーノスが綿々と語つたあとドウランダルテが目覚まし、《自棄を起さずカードを切つてもうひと勝負》と言つた、そういうお話でしたね？ あの言葉から推し量れば、遅くともシャルルマーニュ帝の時代にはすでに広まっていたようですね。こんな文句なり言い

まわしなりは、魔法にかかったあと覚えたとは考えられません。そうなる前、今言ったシャルルマーニュ帝の時代にフランスで覚えたはずです。こうした知識はやはり書きかけのあの別の本、『ヴィルジリオ・ポリドーロ著〈事物起源考〉への補遺』にもつてこい。ポリドーロは確かカードの由来について本に書き漏らしていたはずで、今度はその穴を埋めれば非常に重要な一項目になるでしょう。おまけにドウランダルテ氏みたいな、重厚で嘘偽りない人物を引き合いに出せるんですから。収穫の四つ目は、グアディアナ川の源流のありかが明確になった点です。現在に至るまで人に知られていませんでしたからね」

「仰せごもつと」と、ドン・キホーテ。「されどひとつお尋ねいたしとうござる。幸いさようなご著書を世に出すお許しが出たとして（拙者はいかがかと存するが）、さてそのとき献辞はどなたへ向けてお書きになるご所存かの？」

「スペインには著書を捧げられるような貴顕がおいですよ」と、従兄弟。

「おいそれとはみづかりませぬぞ」と、ドン・キホーテ。「なにもふさわしい方々がおわさぬと申すのでうて、それを好まれぬということ。著者の労と敬意に報いねばならぬと思い、さような義理をお嫌いあそばすゆえでござる。とは申せ拙者、さる殿様を存じあげておつて、その方などはときにほかの殿様方のなさらぬ分どころか、なお補つて余りあるほどの恩恵を垂れてくださります。それをいちいち挙げさせていただけば、おそらくは高潔なる人々のうちにも妬みかられてしまう向きが少なからずござろう。されどこの話はこれまで。いずれまた折りよきときに。今宵の宿を探そうではござらぬか」

「ここから少しいったところにお御堂があつて」と、従兄弟。「そこに隠者がひとり住んでいます。なんでも昔軍隊にいたんだとか。信心家で人物もとても立派、そのうえ慈悲深いという評判ですよ。お御堂の脇に自分で小屋を建ててましてね。小さいんですが、それでも客を泊められるぐらいの広さはあります」

「もしかしてその隠者様は鶏を飼つてなさるかね？」と、サンチョ。

「鶏を飼つておらん隠者なぞ珍しかろうて」と、ドン・キホーテ。「昔、エジプトの砂漠で修行を積んでおつた隠者

らは椰子の葉を身に纏い、草木の根を齧つて暮らしておつたもんじゃが、今は時代が違う。じゃが誤解いたすな。昔の隠者を讀えたからというて、当代の方々を低う見るんではないぞ。苦行いたすというても、その厳しさつらさで今は昔におよばんと言いたいだけじゃ。さりとして当代の隠者がすべていかんわけではない。少なくともわしや尊いと思つておる。それにどう悪う軋んでも清さを装う偽善者のほうが、露骨なる悪人より害は少ないもんじゃ」

ふと気づくとこのとき三人のいるほうへ、男がひとり口バを棒で追いながら急ぎ足で近づいてきていた。口バには槍や斧槍を束にして積んであつた。やがて傍までやつてきた男が挨拶してそのまま通り過ぎようとしたとき、ドン・キホーテが声をかけた。

「あいや、しばらく。ちと急ぎすぎのようじゃ。ラバが顎を出しておりますぞ」

「へえ、でも、ぐずぐずしていらねえで」と、男は答えた。「見なさるとおりこいつに槍を積んでるんですが、これはあした使うやつで悠長にしてられねえ。ごめんくだせえまし。だけど、どうしてこんなの運んでるかお知りになりてえなら、今晚はお御堂を過ぎたところにある宿に泊まるつもりで、もし方角が同じだったらそこでお会えます。珍しい話をお聞かせするですよ。では、もういっぺん、ごめんくだせえまし」

言うとう男はラバを棒で急ぎたて、去つていった。どんな珍しい話を聞かせるつもりかと、ドン・キホーテが問う間もなかつた。彼は知りがりのほうで、いつもなにか新奇なことを見聞きしたくてうずうずしていたから、ただちに發つて、従兄弟が言つていたお御堂には泊まらず、その宿屋で一夜を過ごすと決めた。

異論は出なかつた。三人はそれぞれの乗り物に乗つて、まっすぐ宿屋へ向かう道をとつた。着いたのは暗くなる少し前である。途中で従兄弟がドン・キホーテに、お御堂へ寄つて一杯ひつかけていきましようかと誘つた。サンチョ・パンサはそれを聞くが早いか、口バの鼻面をそちらのほうへ向けた。ドン・キホーテと従兄弟も続いた。だがサンチョのつきのなさが災いしたようで、隠者は留守だった。お御堂においで、の聖女様にそう告げられたのだ。上等の葡萄酒はないかと尋ねると、上等の葡萄酒は置いてありませんが並みの水ならございます、お望みなら喜んでお出しいたします、という答えだった。

「水が飲みたければ」と、サンチヨが言った。「道沿いに井戸があるので、それで間に合わせてるべよ。ああ、カマーチヨ旦那の婚礼よう、ドン・デイエーゴ様のお屋敷のご馳走よう、この先なんべんおめえらに会いてえと思うべなあ！」

こうして三人はお御堂をあとにし、宿屋めざして急いだ。と、まもなく前をいく若者の姿が見えた。若者はのんびり歩いていたので、すぐ追いついた。彼は肩に剣を担ぎ、それに荷物というか包みを括りつけていたが、どうやら中身は自分の服で、おそらくズボン、すなわち幅広ズボン、それにマントとシャツと察せられた。というのも、上は縞子織りつばい光沢のビロードの上着姿だったし、下はシャツの裾をズボンがわりにしていたからだ。足には絹の長靴下と都風の先の四角い靴を履いていた。歳は十八、九だろうか。陽気な表情の捷はじそうな若者だった。彼はセギディーリヤを歌い、てくてく歩くつらさを紛らせていた。追いついたときちようどひとつ歌いおえるところだったが、その歌を従兄弟が記憶に留めた。こんな文句だったとか。

貧しけりゃこそ

ゆくいくさ。

金がかたきよ。

身の因果。

ドン・キホーテがまっさきに若者にこう話しかけた。

「伊達男殿よ、たいそう身軽な格好でお歩きじゃが、どちらへゆきなさる？ さしつかえなくば教えてください」
すると若者は答えて、

「こんな身軽なのは暑さと貧乏のせいだ。いき先は戦場ですよ」

「貧乏のせいとはこれいかに？ 暑さというは、なるほどわかり申すが」そう重ねて訊くと若者は、

「旦那、この包みの中にはビロードのズボンがはいっちゃいます。この上着と揃いのやつで。けれど、こいつを道中で履いてくたびれさせたら、都市まちへ着いたときぱりつとした格好ができなくなっちゃう。かといって替えを

買おうにも先立つもんが……。こうしたわけもあり、また涼しくもありで、こんな格好で歩いてるんですよ。歩兵部隊がここから十二レグアもないところに駐屯してて、これからそこへ行って兵隊にしてもらうんです。軍隊にはいれば荷車があつて、そこから先はきつとそれに乗つて船までいけるでしょう。港はカルタヘーナだろつて話でした。都で文なしの旦那にこき使われるより、王様があるじと仰いでご奉公し、ドンパチでお役に立つほうがましですからね」

「ひよつとして奉公先では支度金をいくらか出してくれましたか？」と、従兄弟が尋ねた。

「大公爵様とか、そんなような上つ方にでもお仕えてたんなら、まず間違ひなく頂戴してたでしょうがね」と、若者。「奉公先がいいとそうなる。下僕が少尉や大尉に出世したり、たんまりお小遣いもらつたりするのは珍しくないから。ところがあたしときたらついでなくて、あるじは官職あさりの連中や、食い扶持探して都にのぼつてきたやつらばかり。出される飯はちよつぱり、渡されるお給金、たつて雀の涙で、襟の糊づけ代払うだけでもう半分ばあですよ。おそらく万にひとつもないでしょうね、渡りの小姓がせめてまあまあ納得できるぐらいのものをいただけるのは」

「そうはいうても」と、ドン・キホーテ。「のう、正直申して下僕稼業で世間を渡るあいだ、まさか一度も貴族の屋敷に雇われんだわけではござるまい」

「ええ、二度ばかり雇われました」と、小姓あがりの若者。「でも修道誓願する前に修道会をおん出るとなつたら、修道服を脱がされ私服を返されるのとおんなじ。旦那が都にきた用事が済んで国に帰るとなつたら、お仕着せをとりあげられ元の木阿弥ですよ。ただ見栄で雇われてたつて次第で」

「それはまた相当のスピロルチェリア（＝けち）でござるのう、イタリア語で申すところの」と、ドン・キホーテは呆れた。「じゃが、ともあれ、さような奇特なる志をいだいて都を去られたを幸せと思ひなされ。この世にては神に仕えるが第一。それに優る名誉も得もござらぬが、その次にくるは国王、生まれ育つた国のあるじへの、とりわけ武勇を揮うてのご奉公。これはもう幾度となく拙者が口にしてまいつたことでござるが、富はさて

おき少なくとも名をあげるについては、武は文に優つてござる。なるほど文の築きあげてきたるものは大にして、武のそれに優ります。されどなお文に携わる者と比べ、武人にはなにかがござる。内になにかしら輝きがあり、他より抜きん出た者としております。

これから申すこと、心に留めおかれるがよい、苦難に際しおおいに力となり慰めとなりましょうゆえ。わが身に降りかかるやもしれぬ不幸をば思い煩うはおよしなされよ。不幸の最たるものは死でござるが、もしもよき死に方なれば、それはもつとも幸いなる不幸。かのローマの勇将ユリウス・カエサルはいかなる死が最良なりやと問われ、思わざる死、予期せざる死、頓死なりと答えた。真の神を知らぬ異教徒なりの答えじゃが、されど人としての恐れを免れることを考えれば的を射ておる。初めていくさに出、合戦に望んで、大砲の一発あるいは地の下の爆薬にて吹き飛ばされ命落とそうとも、それがなんでござろう？ たゞ死ぬだけ、それ以上ではない。ましてテレンティウスも言うております、兵は討ち死にするに面目あり、逃げて無事息災なるに面目なし、隊長はたまた命ずる権限ある者に忠実な分だけよき兵としての名があがる、と。覚えておきなされよ、お若い方、兵には麝香の香りより火薬の匂いが似合い、よしんばこの榮えある務めに励んで老いの身となつたとき満身創痍、そのうえ体が利かぬ——例えば足が利かぬようなつておつたと名ばかりは得ておる、いかに貧窮するともこればかりは少しも傷つきますまい。いわんやちかぢか老兵、廃兵をばいたわり助けよとのお触れが出る運びとなつてござる、なんとなれば、この人々を黒人奴隷同然に扱つてはならぬゆえ。老いてもはや使いものにならぬ黒人奴隷をば解き放ち、自由の身といたすは世間に珍しからぬ話じゃが、これは〈自由人〉の名を与えて屋敷から追い出し、あらたに〈飢え〉の奴隷となすにはかならず。こうなつてはもう死ぬよりほか解放の望みは持てませぬ。ご助言申すはひとまずこのあたりにて。さ、これなるわが馬の尻にお乗りなされ。宿までお連れいたす。宿にて夕餉をともしようではござらぬか。そうして朝になったら、また旅をお続けなされよ。ご奇特なるお志にふさわしきよき道中を願うておりますぞ」

元小姓は相乗りは遠慮したものの、宿屋で夕食をともにとの誘いには応じた。このときサンチョは次のように

呟いたとか。

「てえしたものだなあ、旦那様は！ だけんど、どうなってるだ？ 今みてえにこんな、これだけ立派な言葉が次々口から出てくるお人が、あんなモンテシーノスの洞窟の話なんか……あんな信じられねえ、わけのわからねえもの見たなんて言いなさるかね？ まあ、ええだ、いずれはつきりするべ」

やがて宿屋に着いた。すでに暗くなりかけていた。サンチョはあるじがいつもと違いそれを城ではなくちゃんと宿屋と認識してくれたのを見て、ほっと胸を撫で下ろした。中にはいるなりドン・キホーテが亭主を捕まえ、槍やら斧槍やらを運んでいる男はどこだと尋ねると、馬小屋でラバの世話をしているとの返事だった。従兄弟とサンチョもそこへいって自分達の口バの世話をした。またロシナンテには馬小屋で一番上等の秣桶と特等席をあてがってやった。